
ガリア王家に転生しました。（再構成、オリ主転生チート）

TOMOKICHI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガリア王家に転生しました。（再構成、オリ主転生チート）

【Zコード】

Z5982Z

【作者名】

TOMOKICHI

【あらすじ】

ガリア王家に転生した主人公は自分の身の安全や、精神的ストレスの解消のために青兄弟の和解を目指し動きはじめる。それが全ての始まりだった。

再構成、転生多数、オリ主、チートと言った要素がありますのでご注意を。

また、風の聖痕の精霊術に近い設定がでてきます。ご注意を。

現在再構成中です。暫くお待ちください。

プロローグ

異世界ハルゲギニアに存在する王国「ガリア」の首都リュティスの郊外に建造された王城、ヴェルサルテイル宮殿。

先王によって開かれたこの城は世界中から招かれた建築家や造園師達の手によって現在も拡大を続けている。

ヴェルサルテイル宮殿の中でも一際目立つのはガリアの王族の青い髪と青い目の様に美しい青いレンガとそれと対比する様な薔薇の色をした大理石によって建てられた王の住む城グラン・トロワ。その一室で新たな命が今、誕生しようとしていた。

齢50を超える国王夫妻の妊娠。それはガリアの王家に新たな人間の誕生と同時に無事に生まれるかという疑問も在った。

それは国王夫妻も同様に考え、ガリア中……否、ハルゲギニア中の優秀な^{メイジ}魔法使い。

その中でも医療を得意とする水の属性を持つメイジが集められた。水のメイジ達の力によって大公妃とお腹に眠る命は無事に誕生の時を迎える事が出来たのだ。

無事に産まれて欲しい。

国王は産まれてくる子と妻の無事を祈り、まだかと部屋を回りながらも待ち続けていた。

その様子を見かねて年が一回りも年の離れた弟か妹を持つことになる兄弟の片割れ、シャルルは国王が落ちつけるようにと話しかける。

「父上、落ちついてください」

「しかしだな……」

「父上が言いたいことは解ります。しかし、私達が出来ることは待つことだけです」

むう。と国王は唸り、ゆっくりと椅子に腰を下ろす。
シャルルはほつと一息付き、ソファに腰を深く沈めた。

余談ではあるが、シャルルも数年後に父親と同じ行動に出ることになり兄に咎められるがそれはまだ知ることは無かつた。

その後暫くして部屋の静寂を吹き飛ばすように知らせは届いた。

無事に誕生。大公妃殿下も産まれた王子も共に健康と。

それ聞いた国王は飛び出るよに部屋を出ていき、息子達もそれに続いていった。

新たに産まれた王子はジョルジュと名付けられ、國中から祝福を受ける。

しかし、ジョルジュには異端を持つていることは今は誰も知ることは無かつた。

一つは別の誰かとして生きた記憶。

そして、魔法を生み出す粒を見る事のできる瞳を持つ事をジョルジュ本人以外には……。

1話（前書き）

文章が短いとの「」意見が理ましたので、加筆しました。
どうぞお楽しみを。

オレが目覚めたらいきなり赤ん坊になっていたことはあの時は色々と慌てたり、怯えたりしたものだつた。

目が覚めたら青い髪と目の美人のおばさん……おばさまと言える人に抱かれていたり、その夫のフランシスといつこれまた渋いオジサンに抱かれて

「私がお前のお父さんだよ」

と言つものだから何が何だか分からなくて……泣いた。

大の大人がワンワン泣くのは恥ずかしいものだつたが、オレは赤ん坊だつたしカウントに入れないようにしておこづ。

それで、オレが泣いた時におばさま……オレの母さんというコンスタンスという女性にまた抱かれてそのまま眠ってしまった。

その後夢だと思ったら夢じや無かつたり、最初は気がつかなかつたけどある『モノ』が見えたり、月が一つあつたり、オレの兄弟が20歳以上離れていたり、魔法があつたり、ていうか地球じやなくてハルキゲニアって言う世界だつたりでどう見てもゼロの使い魔です。本当にありがとうございました。と色々と情報を仕入れつつ何度も泣いたけれどこれもカウントに入れないようにした。

言葉、通じるんだね。と思つたけどもう考へることすらリソースが振られないくらい様々な事を知つて、驚き、泣くと言つ事を繰り返したものだつた、

一通り落ちついた時、『今の自分』を改めて認識した。

オレはガリア王国第三王子ジョルジュ・ド・ガリアなのだと。

そして、1年が経ち思い出したのは『前』の最期の記憶。

階段を踏み外して頭を打ち、そのまま死んでいったという記憶。

あつけないけど鮮烈に覚えた情景に思い出した時、自分が死んで別の誰かになつたんだと思った事と、自分が死んだ事を改めて思い出したことで感情がコントロールできなくてワンワンと泣いた。

怖くて怖くて泣いた。

あれが死ぬと言つ事なのか。

もう家族には会えないのか。

そう考えると怖くて心が痛くて泣くしかなかつた。

わんわんと泣く俺を抱きしめて怖くないよと言つてくれたお母さんの声をオレは忘れる事が出来ないだろう。

いきなり泣きだしたから周りの人間がどうした事かと慌てさせたのは本当に恥ずかしい。

というか泣いてぱっかりなオレ。

割と泣きだす所為で兄一人から「良く泣く弟」という認識を受けた時はやっぱり泣いた。

そんなオレの評価は早熟で賢く、良く泣く子という認識を受けたまま成長する。非常に遺憾に思う評価である。

3歳になり、とりあえず状況に慣れる程度自由に動けるような歳になつた。

姿はまだ幼児といつともあつて可愛いとしか言えないが、両親や兄達に似て将来は美丈夫になるのではないかと思う。

髪は正直ロングというのは好きではないので髪が首にかかるない程度にカットしている。

顔のパーツも家族に似ているのだが田つきが猫っぽいと言われた事もある。

総評的には将来有望な男の子といつただろうか。

まあ、王族という補正もあるかもしれないんだけどね。

だけれど自分の青空の様な髪に、海の中から空を覗いた時の様な美しい綺麗な瞳も最初は前の自分とのギャップからくる違和感があった。1年もたつてなれた今は少し恥ずかしいけれど好きな色だと思う。そういうや、青い髪とかつて人間の法則無視しているよなあ。

異世界人だからOKなんだろうか？

3歳の誕生日が過ぎて思いだしたのは兄一人のこと。

『無能』のジョゼフことジョゼ^{にい}兄と『天才』シャルルことシャル兄の事だ。

魔法が使えないだけで他はすべて天才どころか鬼才のジョゼ兄。魔法や他の事まで優秀なシャル兄。

魔法使いが絶対的な権力を握る世界で魔法と言つ力が使えないと言うジョゼ兄は無能という扱いを受け、天才的な魔法操るシャル兄を王にという声まであるのは必然だった。

正直、父のフランシスが無能ならばシャル兄が選ばれた可能性は高い。

だけれど、お父さんも十分に優秀な人であり王だ。

恐らく本当に王として優れた人間は誰なのかもわかっている。しかし、魔法が使えないと言う事で反発も受けける可能性がある。二人の息子のどちらを王にするかお父さんは悩んでいるのだろう。時々、二人を見ている時に険しい顔になるときがあるがそれがその証拠なのかもしれない。

オレの想像にすぎないのだけどね。

ただ、ヘラヘラと王子生活を満喫していたら正直ヤバイです。

原作の流れに流れていくのならこのままだとジョゼ兄はシャル兄を殺す。そして最愛で最も妬んでいた弟を殺したジョゼ兄は、憎しみも愛情も喜びも怒りも悲しみも全ての感情を失つてからっぽな心のまま全てを壊すとするだろう。

過ごした時間は短いけれど、可愛がってくれる兄一人がお互いを妬んだまま殺し合わせたくない。

二人の仲を取り持ちたいと思うのはオレの打算もあるかもしない。でも、二人に心から笑いあって欲しいのも事実だ。

また、こういう時原作ブレイクなんて……とかなんとか言う奴が居るのかかもしれないが、放置しておいたら主にオレの命とか精神がヤバイ。

下手したら反乱の神輿として担ぎあげられるかもしないし、原作通りにタバサ……シャルロットが王位を篡奪すればオレもどちらの陣営に居たのかで物理的に首が飛ぶ可能性もある。

動機としては褒められたものではないかもしないが、とりあえずの目的として二人の兄の仲を取り持とうと思つ。

こういう時、どうすれば良いのだろうか？

そう思い考える。

二人のコンプレックスの原因の大本は魔法であることだ。

魔法をジョゼ兄がドットクラスでも使えたら魔法を諦められたのかもしぬれない。

シャル兄もジョゼ兄に対抗する為に魔法を鍛える可能性はあっても、自身が王へと言う気持ちは薄くなっていたのかもしぬれない。

原因であるが、解決もやはり魔法だ。上手く利用できれば二人の仲も取り持つ事が出来るのかもと思った俺は、魔法を使いたいと駄々をこね始めることにした。

結果として、すごく……穴があつたら入りたいです。

泣いて喚いて叫んでお願ひして泣いて泣いてお願ひして転がってと全身で魔法を使いたいですとアピールをしたのは凄い恥ずかしかった。

素直にお父さんに使いたいとお願ひすればよかつたのかもしない。

ただ、魔法を使わせてもらひえむよひになつた事を思えば耐えられる話だつた。

むしろ思わないと首を括りたくなる衝動に襲われる。なんでもつとい方法思いつかなかつたのだろうか。

「それじゃあ、まずは杖の契約だ。この杖を肌身離さず持つていておきなさい。暫くしたら契約は完了する。そうすれば魔法を使えるようになる」

そういうお父さんから杖を貰つ。

木製の豪華な飾りの彫りが入つた15サントの短い杖だけ今自分には長いと感じるだろつ。

僕は言われたとおりに肌身離さず持ち始めた。

1日目

杖を離さずに持つたまま城の中を散歩しているとジョゼ兄に会つた。ジョゼ兄に杖の契約をしていると教えたら「俺みたいな無能者にはなるなよ」と自虐してくれた。

流石にネガティブな兄さんはダメだと思いとつあえず殴つて叱つてみた。

あきらめんなよあきらめんなよおまえなにあきらめようとしているんだよどうしてあきらめようとしているんだよあきらめたらそこでおわりだらもうこしがんばってみるよやればできるつていわけしてるんじゃないのもつとがんばればできるひとおもえばできるんだってだからもつとあつくくなれよ！－！－！

と最終的にジョゼ兄と叫んで正直自分でも何を言つていいのか解らなかつたけど熱い心を伝えられたから良いかなと思つ。ととりあえず修造へ。と言いたくなつた。

なんで修造だつたんだろ?と今思えば全くわからない。

ジョゼ兄は「そうだな……俺は今まで熱い心と言ひものを忘れていたな」と笑いながら去つていった。

け、結果オーライ?

騒いでいたのでお父さんに怒られてお母さんにお尻叩かれた。グスン。

2田畠

ちょっと新しい世界が見えそうな気がした氣もするけど氣のせいだと思ひ。

今日はシャル兄に会つた。

毎日会えないってどうよと思つたけれど、シャル兄は公爵で自分の領地も持つてゐるし奥さんもいるので忙しいのだろう。

シャル兄さんに杖の契約をしていと話し、兄さんみたいな立派なメイジになりたいと話すと笑顔だけど何か陰がさした気がした。暗い顔をしてどうしたの?と聞くとハッとして、なんでもない。なんでもないんだと言つて去つていった。

……「ンプレックス刺激しちゃつた?

どうしたものか……。

3田畠

今日も杖を持つたまま城の中を歩いた。

貴族の人人が居たけど、オレを見たまま

「やつぱり、ありえない……オリキャラなのか……? それとも……? とブツブツ言つてた。

同郷の人?

転生者つて他にもいるの?

4田畠

暇だったのでひびきでもなれーっと杖を持つたままクルクル回

つた。

回っているのが単純に楽しくなつて回り続けていたらふと誰かが見て
いる事に気がついた。

ふらつく頭を押さえてみればシャル兄だつた。

シャル兄はにつこりと笑つたままそのまま去つていった。

俺は茫然として見届けてしまつたくあ w se d r f t g y ふじこ ウ：

@

5日目

見られた。死にたい。

6日目

なんとか立ち直り、杖を持って散歩に出かけた。

今日は東花壇に行つてみることにする。

途中東薔薇騎士団の訓練の姿が見えたので覗いてみた。

薔薇なだけに、ウホッな展開は無かつた。そもそも期待したくはない。

覗いていたら魔法も使う訓練のようでそれを見ていた。
まだ使えないけれど眼のおかげで参考になつたと思う。
見届けた後、オレはそのまま花壇の方へと向かつて行つた。

7日目

杖の契約が完了したっぽい気がする。

いまいち正確さが解らん。

こり、ピカ一つて光つてくれたら便利なんだろうけどね。

とりあえずお父さんへ契約ができるかもつて報告に行くことにした。

魔法を使えるのが楽しみだ。

お父さんに報告した所、明日魔法の先生を紹介すると言われワクワクしながら眠つた。

次の日、オレは庭に連れて行ってもらい魔法の先生を紹介された。どんな人かと思つたらシャル兄だつた。

忙しくないの?と思つていたらシャル兄は思つていた事を感じ取つたらしく

「弟に教える為に暫く仕事を片づけていたんだよ」と言つてくれた。どうやらこの1週間で色々と仕事を片づけていたらしくオレとしては頭が上がらない。

シャル兄の傍にはジョゼ兄も居て、オレが魔法を使える所を見に来てくれたらしい。

でもオレ見るのはついでで、自分も魔法の練習をしにきただけだと言つていたのでちょっとシンデレと思つたけど言葉の通りなんだろうなあ。

話を戻して、シャル兄の講習に戻つた。

魔法と言つのは杖に精神力を通し呪文を唱える事により魔法を発現するということらしい。

その際に大事なのが使いたい魔法へのイメージを明確にすることだと教わつた。

説明を受けた後、シャル兄が実演するそつなのでオレもその様子を『眼』でじっくりと見て観察した。

シャル兄が最初に唱えたのは風を起こす初步の初步の風の系統魔法「ウインド」だ。

『眼』を通して見た光景は、杖の周りに輝く緑や白の粒が集まり詠唱の完成と共に粒達がくるりと風のよつに辺りを巡る。

この『眼』は生まれてからずっと見えていたもので『粒』が何なのが俺には良く分からなかつた。

ただ、魔法に関係があると言つ事だけは三年という短い時間の中でも気がつく事だけは出来た。

騎士達の魔法の訓練で見た時の様に粒達は杖を巡り、集まりシャル

兄の周辺を舞う。

暫く輝く粒達が舞う様子に見とれていたときにシャル兄の声がかかった。

「さあ、ジョルジュ。やつてみなさい」

オレは頷いて、シャル兄がやつた時の様に風のイメージ、粒の流れをイメージして呪文を唱える。

杖に集まる粒の流れをハツキリと感じた時に今まで感じたことのない感覚を感じていた！

ハツキリとは解らないけれどそれは粒から感じた様に思えた。

この感覚は一体何なのだろうか？

その答えが出ないまま、オレはゆっくりと唱えていた魔法を完成させた。

ゴオ！

一瞬ではあるが、強い風が吹き粒を巻き上げながら空へ舞った。イメージとは違う魔法の流れから感じたのは何だったのだろう。正体を知りたいと言う好奇心のままにオレは目を閉じてもう一度呪文を唱える。

知りたい！

知りたいんだ！

この感覚を知りたい。

この感覚を伝えてくるものを知りたい。

教えて欲しい。

教えてくれ！

何度も何度も正体を知りたいと願い、思い杖へと願う。

杖へと願ううちに最初は漠然と。

でもそれが何なのか解つて来るにつちにあの感覚の正体が核心へと変わつた。

意思だ。人間の様にハツキリと形を持つていなけれど人間よりも細かく、大きな意思を感じた。

風の意思。

自分達は風の表現者。

風の精霊。

この時初めてオレの『眼』が何を見ているのかが理解できた。理解した瞬間にまた意思が伝わつてくる。

それは歓喜。

やつと気が付いてくれたと。

よつやく伝える事ができたと喜んでいる。

オレは今まで知らなかつた事が恥ずかしかつた。

そして気がつかなかつたオレに意思を伝えてくれることがとても嬉しかつた。

そしてオレは願う。

力を貸してほしいと。

願いは精霊達に届き、より一層杖に集まる精霊達の数が増える。その様子を見たオレは、心が思つままに呪文を唱え終わる。

力強く、また優しく包んでくれる風が辺り一面へと巡る。

風が吹きやんとき、オレはありがとうと言える。

精霊達にそれが伝わると嬉しそうに輝いた。

「ジョルジュ？」

そう声がかけられずつと集中していたのか、周りの様子に気がついた。

周りでは驚いたシャル兄やジョゼ兄、護衛達の姿があつた。

……何かやらかしてしまった？

ちょっと嫌な予感がして冷や汗が流れた気がした。

2話（前書き）

ストック書きためてから投稿すれば良かつたと今更ながら公開。
プロットというか入学までの流れはあるんだけどね。o/re

シャルルとジョゼフの性格がかなり原作と違つ氣がする。

シャルルが割とネガティブに、ジョゼフがはっちゃけた性格になつてるのは何故なんだろうか。俺にもわかりません。

シャルル視点

僕の弟、ジョルジュは変わった子だと思つ。

最近1歳になつたシャルロットに比べるとジョルジュはそこまで手はからなかつたと聞くけれど、良く泣いた様な氣もする。

とはいへ、悪戯好きで変わつた子ではあるけれどジョルジュは賢い子供だし僕たち兄弟によく着いて回つて「コニコ」と笑つてゐる所を見ると嬉しくなつてくる。

昔は僕達もこうやって笑い合つていたと。

だけど何時からだらうか、心の底から笑いあえなくなつたのは。

魔法が使えない兄さんに変わつて僕がガリアの王になり変わつと思つたのは何時だらうか。

魔法が使えない兄さんだけれどチエスも乗馬も剣も全て兄さんに叶わない事を知つたのは何時だらうか。

だけれどそれを認めたくない。兄さんに悔しさで歪む顔をみたい。そう思い今まで魔法を血反吐を吐いて鍛えてきた。

ジョルジュに魔法を教えようと思ったのだつて、優秀な所を周りに見せつけようと言う考えもあり名乗りを挙げた。

このことは受け入れられ、優しい兄という事を印象付ける事が出来たはずだった。

だけど……だけれど……、

ジョルジュに簡単な風の魔法を教えた時、その考え方をあざ笑うかのように吹きすさんだ。

初めて唱えた呪文は一瞬だけだけ強い風が起つる。

不完全だけれど初めてで此処まで魔法を使えるなんてさすが優秀な僕の弟だ！

そう思つていた僕の心は、虚栄心はもう一度となえられた呪文によ

つて吹き飛ばされたのだ！

庭一面を巡る風には単なる風を起こす魔法では考へられないほどの規模と風に感じられる力が感じられた。

それを魔法を今日初めてという子供が使って見せたのだ。
その光景をまじまじと見せつけられたとき、一つの単語が頭をよぎる。

天才

この名は僕の血の滲むような努力によつて作られたものだ。
僕の魔法を見た人間達は「流石シャルル様」と褒め称えてくれる。
だけど、ジョルジュの魔法を見た時そんな思いがとてもちっぽけに感じられた。

ダメだ。

ダメなんだ！

兄さんに勝てない僕が唯一勝つことのできるモノが魔法なんだ！！
魔法の天才という名をジョルジュに取られたら一体何を誇れば良いんだ！

僕の今までを否定しないで！

ああ、ジョルジュ。

その場所はぼくの場所なんだ！

うばわないでくれ！

ジョルジュ！！

ジョゼフ視点

末弟ジョルジュは変な奴だ。

いきなり踊りだしたかと思えばその次はジョルジュの年齢では理解が出来ないと言つても良い本を理解して読んでいる。

チェスをやつてみたいと言うので、期待してみればあっさりと負け悔しがり、何度も勝負を挑んでは負け最後には泣いてしまいその後は俺が泣かしてしまったと言つ事になる。

その後は申し訳なさそうに謝りに来たりと見ている分には動物がチヨコチヨコ動いているようで面白い。

ただ、割ととばっちらりが俺に飛んでくるのはどうにかして欲しいものだがな。

先日ジョルジュの奴が魔法を覚えるのだと嬉しそうに笑った時にぽろりと「俺のような無能になるな」とこぼした事があった。

それを聞いたジョルジュは俺の体をよじ登り、そのまま杖で頭を叩き説教された。

3歳児に説教される大人という図は俺の有つて無い様な体裁が崩れそうで非常に困るのだがあの馬鹿はそんな事を気にもせず俺に諦めるなど何度も声をかけ続け、最終的には一緒に燃え上がるぞ！と暴走し始める。

いつものことと思い大人しく付き合つたものだが、これがなかなか楽しいものだつた。

普段中傷を受ける俺の心は覚めきつていたものだが久々に心が燃え上がる。

その心のまま、久しくやつていなかつた魔法を練習してみようと思いいジョルジュの魔法の練習の日に顔を出した。

ジョルジュの奴は俺に似ず、シャルルのように魔法の才能があるのか一度で風を起こしその次には更に大きな風を起したのだ。

並みのメイジでは不可能な風を起こすジョルジュの姿にシャルルの背中が見えた気がした。

一瞬見間違えそうになつたが、そんなわけがないと俺は頭を振りシャルルの方を見た。

シャルルの奴もおどろいているだらう、そう思つていた俺の期待は裏切られた。

シャルルがジョルジュを睨んでいる。

違う、ジョルジュを見るシャルルの顔には見覚えがある。その顔を俺は知つてゐる。

シャルルは直ぐに我を取り戻しジョルジュに声をかける。

いつものシャルルだ。

その様子を見て俺も落ちつく。

だが、シャルルがジョルジュにあの表情を向けるのか？

ありえない。

だが、今の光景を認めるしかない。

シャルルがジョルジュに嫉妬しているのだと。そう認めた時に悔しかれと、愉快さと、安心が混ざった様な感情が巻きあがる。

悔しいなあ、ああ悔しい。

全く、笑い話にもならないな。

あのシャルルが嫉妬しているなんて！
その顔を見る事ができただなんて！

そしてその顔を見せたのがジョルジュだなんて！

ああ、悔しいなあ。

その表情を自分が見せてみたかった。見せつけてやりたかった。
だが、アソシも完璧ではないと言う事が解つただけでも少し心の底に淀んでいたものが晴れた気がする。

全く悪趣味な。

自分でそつと嘲するが、どうしてこんなに安心するのか全く不思議だ。

だが、シャルルともう少しだけ本音を交えてみたい。そんな事も考えていると自然と笑みが浮かんでいた。

ジョルジュ視点

精霊の力を借りて魔法で風を起こしたら周りから凄く見られています。

オレ、なんかやらかしちゃったのか？

そう思っていました。

「ジョルジュ。すういじやないか！」

そつとシャル兄がオレを抱っこして持ちあげて抱きしめた。
褒められてちょっと嬉しい。

シャル兄は俺を下ろしてから聞いてきた。

「こんなにすごい風はトライアングルのメイジでも吹かせる事が出来る人はそうそういないよ！
どうやって呪文を唱えたんだい？」

ちよつと返答に困るのだけれど言つた方が良いのかなあ……でも粒（精霊）が見えますつて言つても下手したら異端といつレベルじゃないし……。

悩んでいるうちに黙り込んでしまったオレを見てシャル兄は言つ。

「言えないのかい？」

「……（口クン）。家族だけでお話しさせて欲しいです」

「（）では言えない事なのかい？」

「うん。オレもちょっと整理する時間が欲しいんだ」

「だけれど、皆に内緒と言つのは……」「シャルル」…兄さん

「お前の言いたいことは解るが、ジョルジュも困っているだひつ。

後で話し合おう」

「……解りました。では、また昼食の時にお願いします」

そう言ってシャルル兄は去つていった。

序に周りの人達もシャルル兄についていつて、ここに残つたのはオレとジョゼ兄だけ。

……あれ？ 魔法の練習は？

「そんな顔をしなくても呪文の詠唱くらいは教えてやる。あとは自力でなんとかしろ」

「むう」

色々と文句を言いたいけれどオレは渋々承諾した。

それでもジョゼ兄が先に手本を見せてくれるらしく「期待するなよ」という言葉と共に火を点ける魔法の詠唱を唱え始めた。

杖に集まるのは赤やオレンジといった火を連想させる精霊達。これが火の精霊なのだろうと結論付けてジョゼ兄の杖を見る。するとどうだろつ。

精霊が碎けて銀色のような靄になつたではないか。

杖の先に集まつた靄は詠唱が完成すると同時に弾けて、そこからまた精霊達が生まれた。

魔法は何も起こらない。

「フッ……やはり何も起こらぬか

「違う。魔法は起つていたよ」

「ジョルジュ？」

「うん……ジョゼ兄の魔法の事も一緒にお昼の後で話したいけどいいかな？」

「構わぬがどうかしたのか？」

「ちょっとね」

あの靄は俺の思った通りのものならば理屈は通つている。

粒の粒。つまりは……虚無。

オレがジョゼ兄の属性を虚無だと知つてはいるからこそ解るものだ。あれはブリミルが記した粒の粒。

精靈達の根源なのだろう。

オレの眼が虚無を粒という形では無くても見れるのは始祖の血のおかげなのだろうか？

疑問は尽きないけれど、ただ解つてはいる事が一つだけ。

「面倒が増えちゃつたなあ……

「何か言つたか？」

「べつにー」

ジョゼ兄に教わった簡単な呪文にいくつか成功させ、威力も大分絞れた時に丁度お昼になつた。

静か過ぎる昼食が終わり王族のプライベートルームに家族全員が集まる事になつた。

とはいへ、兄さん一人の奥さんトイザベラとシャルロットは来てはいない。

この場に居るのはお父さんとお母さん。ジョゼ兄にシャル兄、そし

てオレの5人だけだ。

少し重い空氣の中、オレは自分の『眼』と眼を通して映すモノについて話し始めた。

「オレの魔法についてだけど、もの『じ』うが着いたときから見えていたものがあるんだ。

それは小さくても強く輝く粒。生まれた時からずっとその粒が見えていたんだ。

そして、その粒がメイジ達が魔法を使う時に魔法に合わせて集まつて魔法になるという様子も見てきた」

「今までこの粒の事は解らなかつたけれど杖を持って呪文を口にしたときに粒から感じる意思が伝わってきた。

オレはその意思が何なのかを知りたくてもう一度強く粒の意思を感じ取ろうとした時に粒の正体を知る事が出来た」

「……して、その正体とは？」

「何処にでも居て、メイジ達が恐れていて、そしてメイジ達が気がつくことのなかつた存在。

始祖ブリミルが粒と云い現わした存在。粒の正体は精霊です」

言いきつた時にやつぱりというかジョゼ兄を除いた3人の顔が険しくなつた。

だけれどもう少しだけ付き合つて欲しい。

「系統魔法とは粒を操る魔法。即ち精霊をメイジの意思によつて制御し、その力を行使する魔法です。

事実、オレは精霊に力を貸してほしいと願い系統魔法による風の魔法を起こしました」

「だが、それが易々と信じられるものではないと解つておるな」

お父さんが低く強い威厳を感じさせる声で囁いてくる。

「うん。先住の力、先住魔法も精霊の力を使う魔法だから同一視する」ことはブリミル教の教えからは異端だね」「それが解つておきながら何故系統魔法が精霊の力だと囁うのだ？」

「…オレは今まで見てこなかつた友達を紹介したかつたんだ」「友達だと？」

「うん。オレが渡せるものなんて無いのにオレの願いを聞いてくれたり、オレに力を貸してくれる精霊をオレは友達だと思つてゐる。だから信じて貰えなくともお父さん達に教えたかった。話すなら本当の事を伝えたいと思つた。ただそれだけだよ」

オレが良い終わるとお父さんが深く息を吐いて、さつきとは打つて変わつて優しい声で囁つた。

「ジヨルジュの言つたいことは解つた。お前が真剣なときに嘘なんてつかないだろ？本当に精霊と信じることは出来ないが、お前の囁つとおりに魔法に強く関わる何かがあるのかも知れない。でもそれは他のものに知られてはいけない事は解つてあるな？」

オレはもちろんだと頷く。

流石にこの話題を信用できる人以外には話したくはない。
異端認定とかされても正直迷惑以外の何物でもないからだ。

「ならば良し。この話題は家族の者以外には話す事は禁止だ。他のものも解つておるな？」

お父さんの言葉に皆は頷いた。

ただ、もう一つのこれまた大きな話題があるのでこれも話さないといけないだろ？

「それともうひとつ、話したい事があるんだ」

「この言葉にお父さん達はまだあるのかという表情をしたけど。うん、まだなんだ。

「今日、ジョゼ兄の魔法を見て知った事があります。ジョゼ兄は魔法が使えない理由。それがオレの眼で見えたんです」

その言葉にまた皆が険しい顔をする。

「通常のメイジが呪文を唱えると粒達が集まって形となつて魔法となります。でもジョゼ兄の場合、集まつた粒が砕けて靄になるんです。

その靄が呪文が完成した時に弾けてまた粒に戻るんです。この現象の所為でジョゼ兄は魔法が使えないんだと思うんだ」

粒が砕けてとこりとこで、お父さんも少し思い当たる事があるみたいで確認するような口調で訪ねてくる。

「その事からジョルジュ、お前は何を想像した?」

「……言つても良いの?」

「言つ為に話したのだろう」

「はい。では改めて。兄、ジョゼフが系統魔法を使えない理由。それは虚無の系統からではないかとオレは推測します」「ちょっと待て、ありえないだろー。」

ジョゼ兄が席を立ち、そう言った。

一応原作知識と照らし合わせた根拠もあるのでそれを書く。

「一つはジョゼ兄が始祖から続く血を受け継ぐの人間の一人であること。

一つは始祖は粒の更なる粒を操ったとされること。

一つは系統魔法が使えないにも関わらず、杖の契約を行え、ディテクトマジックによる診断でもメイジだと言つ事

一つはこれらの点から推測されるのはジョゼ兄が系統魔法を使えないのは土水火風いずれの系統にも当てはまらない、失われたペンタゴン最後の一角ということです」

「だが、虚無の系統は既に失われてある。虚無の証明はどうするのだ？」

「王家に伝わる始祖の秘宝。それをジョゼ兄に使わせてみるのはどうでしょうか？」

マジックアイテムとしての効果が不明の国宝ですが、もし虚無の系統に関するものならば虚無の系統の可能性が高いジョゼ兄につかわせてみれば何かわかるかも」

オレの推測に納得したのか、お父さんはいつ言った。

「成程。確かにジョルジュの考えには一理あるだろう。今夜その眞偽を確認する為にもう一度この部屋に集まつて欲しい。皆も良いな」「……父上、もし兄上が虚無の扱い手ならば兄上はどうなるのでしょうか？」

「シャルル。聰明なお前のことだ、もう解つてあるだろう。私は虚無の復活などと大々的に宣伝する気はないが、始祖に選ばれた者が王位に就く。それが正しい在り方だ」

「しかし……」

「全ては夜に解るだらう。この場は一時解散とする。」

そう締めくくつてお父さんとお母さんは部屋から出ていった。
ジョゼ兄も部屋から出て、オレはシャル兄に声をかけようと思つた

けれど何も言えずに部屋をでる。
シャル兄だけになつた部屋で兄さんが何を思ったのか知ることは出来なかつた。

オレは庭に戻つて魔法の練習を始めた。

土を盛り上げる呪文。

水を操る呪文。

風を吹かせる呪文。

火を起こす呪文。

それぞれの魔法の呪文を唱えてみたところ、自分に一番しつくりきた系統は火ではないのかと思う。

勿論、最初に唱えた風の相性も良いけれど、火の相性はなんというか感覚的な表現ではあるが、もつと近い所にある気がした。

とはいって、そもそも3歳の子供がドットレベルで最も初步の初步という呪文を全部の系統で操れるっていうのは異常らしい。ってジョゼ兄が言っていた。

勿論、こう云う事の出来る理由は精霊の力を借りる事が出来ているからなんだけれどね。

とはいって、優れたメイジの素養を持っていたとしても王族のオレが戦闘だのなんだと何か出来るわけでもないし、精々が宴会芸として使えるくらいなんだよな。

そう思うとちょっとやる気が無くなってきた。

思いつきりぶつ放してみたい。

こんなトリガーでハッピーな思考も浮上するが、ちょっとどうじではない規模で不味い氣がしたので誘惑を振り切るように頬をペチンと叩く。

うしつ！再開だ。

基本はある程度覚えたので、もつ少し高度な魔法に挑戦してみよう。とはいっても今唱えたのが初歩の初歩なら、これからのは初歩の魔法だ。

『ファイアー・ボール』と『エア・ハンマー』。

この二つの魔法を使ってみようと思うが、人に当たらないようにしないといけないだろう。

なので、オレの近くで見ていた護衛衛士に周りに人が居ないか、居たら特別な用事が無い限りは近付かないようことに回ること指示を出した。

暫く待つた所で衛士が返つて来て問題は無じことこのことで早速呪文を唱えた。

杖を持ち、精霊へ力の助力を願い、ルーンを唱える。
そして…

「……ファイアー・ボール！」

言葉と共に生み出された火球は真っ直ぐに飛び、草の無い剥き出しの地面に掛け落ちる。

着弾と同時に炎が炸裂し、衝撃音と共に燃え散つて行つた。

初めてにしては上出来なのかな？

そう思つてはいても比較する対象や出来を教えてくれる人間は居ないからどうしようもない。

気を取り直して次は『エア・ハンマー』に挑戦してみよう。
さつきと同じよう、たまやき、いのり、ねんじゅー……ではなくく。

精霊達に願い、ルーンを唱え、その力を解放する！

「ラナ・デル・ワインター『ニア・ハンマー』」

解放されたスペルが、精靈が一つに固まり、圧縮された空氣となる。その空氣の鎌が弧を描いて焦げ跡の残った地面を目印に叩き込まれた。

叩き込まれると同時に土煙が巻き上げられ、強い振動が足に伝わり、音が弾け飛ぶ。

煙が晴れると、土を抉つた跡が残された。

これ人に撃つたらミンチつていうレベルじゃないよね……？

そんな考えが脳裏を掠め、ちょっと冷や汗が流れた。

「あ、あの、ジョルジュ殿下。この跡は一体……？」

ふと声をかけられ、振り向くと騎士の格好をした人間が立っていた。おおう。ちょっとびっくりして後ろに下がってしまったぜ。どうやら、魔法の様子で少し騒ぎになってしまったようだ。隠す事でもないので、正直に話そうと思つ。

「エア・ハンマーの魔法を練習していたのだけれど、練習する場所が悪かつた？」

「い、いえ！ ですが、エア・ハンマーなんてライン・スペルを本当に使いになられたのですか！？」

「……ライン・スペル？ ドット・スペルじゃないの？」

え、ちょっとまって。

エア・ハンマーってドット・スペルじゃねーの？

「違います！ エア・ハンマーは『風』と『風』を一乗したライン・

スペルですよ！」

「なにそれこわい

「怖いって……。いえ、失礼しました！ エア・ハンマーは正真正銘のライン・スペルなのですが、本当に使えたのかをもう一度使って頂けませんでしょうか？ 私は風のスクウェアのメイジですのでそれがエア・ハンマーなのか判断も出来ますから。」

「ああ……、うん。わかったよ。」

ライン・スペルつてまじかよ！ と軽く混乱していたオレだけど、もう既に引き返せないような状態に入っている事だけは理解できた。どうにでもなれと深呼吸をして、空気を入れ替えると同時に精神を切り替える。

「『H-A・H-A-N-M-A-R-E』！」

スペルを唱え、先ほどと同じような空氣の塊が土を抉る。それを見た騎士が口をパクパクとさせながらも、オレが見ている事に気が付いて佇まいを戻す。

「で、殿下。そのお歳でもう既にライン・スペルをお使いになれるとは流石です……。何時から練習されていたのでしょうか？」

「今日からですが。」

空気が凍るつてのは一いつこいつ事を言つんだね。と頭の片隅でそう思つた。

٥

-
5?
」

「ちくしょおおおおおーーー！俺がどんだけ苦労してスクウェアになつたって言うんだあああああーーー！血か！才能か！最初からワインクラスだつて！ちくしょおおおおーーー！」

明らかに王族への暴言ではあるが、オレの所為なのでどうしようつもない。

「騎士の精神が魂の叫びから帰還して、自分が何を言ったのかと言つ
事に気が付き慌てて謝罪を言い始める。
しかないだろうな。」

「も、もひし訳御座いませんでした！
暴言を…この責任は私だけに…！」

「あー……いや。オレも気にしないから別に良いよ。ただ、これからは僕をつけてね。」

「やついつ詫には參りません！ 責が無いなどと、王族に向かつての暴言を何も無しに許して戴くなんて事はできません！」

3歳児に罰をどうか私に！と聞くとちょっと性癖が怪しい人に見えるけれど、それはオレの頭がおかしいからで相手は『よく普通に言つているのだろう。

流石に不意にとはいえ王族の前で王族の暴言を吐いて何も無しと言
うのはオレが舐められ、王家が舐められるといつもいつに解釈される
のかもしない。

そう考へると確かに罰を『『えない』』といけないのだろう。
どうしようかなあ……。

といふか、周りに人が集まつてゐるし……。

あー、うん。

しうがないよね。

「ならば、ジョルジュの名のもとに罰を『『える』』。お前の名前は？」

王族らしくにオレは問うた。

実際はちょっと舌が足りない」ところがあるので、威儀は何も無い感じではあるが。まあいい。

「東薔薇騎士団所属。エルネスト・シャペルでござります。」

「エルネスト。顔を出せ。」

「は、はつ！」

騎士、エルネストが顔をオレの前に出した。
そして出された顔の頬を俺が叩く。

幼児の力しか無いので痛くもなんともないが、一応罰といふ形ではあるだろ？。

「たしか風のスクウェアだつたな？」

「は、はいっ！」

「なら暫くオレに風の魔法を教える事。頬を叩いた事と、これを罰
とし、オレはお前を許す！」

「寛大な処遇！ 殿下、ありがとうございます！」

エルネストは跪き、頭を垂れる。

「これにてこの件は解決とする！ 周りの者は各自の仕事に戻れ！」

そう言つと、慌てた様に何事かと見ていた周りの人間が仕事へ戻る
為に立ち去つて行く。

エルネストもオレに何度もお礼を言つてきて、仕事に戻りますと最
敬礼をして立ち去つて行つた。

誰も居なくなつた庭で空を眺めてみると、エア・ハンマーのスペル
を教えたジョゼ兄が爽やかな笑顔でサムズアップしている様子を幻
視したので、ムカついて空に向かつてエア・ハンマーを唱えた。
当り前ではあるが、手応えが無かつたので後で本物を殴りつと思
いオレも庭から出ていつた。

ちなみに、この件で流石にエルネストがあの罪で許すのはどうかと
いう事で騎士団から自主退団する事になり、

オレの風の魔法の教師兼、護衛兼、従者となる事となつた。

3役をこなすと言つ事で給料が騎士団の2倍になつたらしく本人に
は不満が無く。

騎士団除名という不名誉はあれど、恩賞とも言つて良い処遇に感動
し、オレと王家への末代までの忠誠を誓うと杖を捧げたのだつた。
これが後の『忠犬』のエルネスト（本人は最期まで『忠献』と言
張つていたが。）の誕生となつたのは余談ではある。

その後、ジョゼ兄を探して城内を巡つていたが、オレの行動を察し
たのか夜になるまで見つける事が出来ず。

夕飯時に発見し、殴りつと飛びかかりお父さんからレジテーションで縛られ、お母さんとツインで叱られたこととなつた。

ジョゼ兄はそれをニヤニヤしながらワインを飲んでおり、後からやつてきたシャル兄も何事かと眼を丸くし、事情をジョゼ兄から聞くと笑い始めた。

ちくしょおおおおおおおお……（泣）

説教が終わり、あらためて始祖への祈りを捧げた後に夕飯を食べはじめ、ジョゼ兄が魔法の練習はどうだったんだとまだニヤニヤしながら聞いてきた。

お父さんたちもどうだつたんだと聞いてきたので、何時か青髭毛り取ると心に決めつつも答えた。

お父さん達はライン・スペルが使えたと言う事で驚くも直ぐに落ち着きを取り戻し、自らの才能に溺れてはいけないぞといふ言葉を貰つた。

締めに流石ジョルジュだと褒めてくれて、ジョゼ兄もジョルジュだからなと言つてくれた。シャル兄も流石僕達の弟だと言つてくれた。とりあえずジョゼ兄には、お前の所為だコンニヤローと眼線を送つておいた。

「フッ…」

「ハッ！」

どちらがどちらのかは言わなくとも解ると思つ。

そんな王家の食卓にしては騒がしいひと時を過いした。

夕食の後、昼と同じく、王族専用のプライベートルームに集まつた

5人はソファに座り、言葉を待つ。

「さて、始祖から続く秘宝。『始祖の香炉』だ。王にしか持てぬ秘宝ではあるが、実際に香炉として使っても何も匂いがしないものではあるが……。ジョゼフよ使ってみなさい。」

お父さんから香炉を受け取り、ジョゼ兄は火をつけるがジョゼ兄も何も臭わないと首を振る。

「ううむ……。どうこういつ」とか。何もわからぬとは。

「お父さん。確かにもう一つ秘宝がありますよね。確か『土のルビー』だったかと。」

オレはお父さんの指に輝く茶色い宝石の指輪を指す。

「……ふむ？ 確かにこの一つは同じ時から存在するものだ。ジョゼフ。これを嵌めてもう一度試しなさい。」

渡された『土のルビー』を指に嵌め、怪訝な顔をしながらも、もう一度使おうと香炉へ触れる。
触れたその瞬間にジョゼ兄の顔が変わった。

「……なんだって？」

「ジヨゼフよ。どうした？」

「香炉から香りが漂つてきました。そしてその匂いを嗅べと言葉が浮かんでくるのです。」

「……香りだと…？ 何も匂わぬが。」

「兄上、言葉とは？」

ジョゼ兄は言つ。

この香炉が虚無の系統を持つ者にしか扱えない事。
悪用されたり、盗まれたりする事を防ぐために虚無の扱い手でも土
のルビーを着けてないと決して触れても香炉は使えない事。
そして、虚無のスペルを知ったと言う事をブリミルの名と共に教え
られた。

何か足りない気もするが、ジョゼ兄が何かを考えているのだろうと
思い何も聞かない事にした。

そして、虚無のスペルが使えるのかと試す事になった。

ジョゼ兄が覚えたのは『アクセラレーション（加速）』と『エクス
プロージョン（爆発）』の魔法。

自分が消費するのは精神力だけという、自分だけが加速し、全ての
時間が止まつたような世界の中を自由に動けると言つ、これなん
てスター・プラチナ。あるいは、とらハ的『神速』なの？ つていう
チートスペル。

いや、アクセラレーションだから、口笛と荒野の世界の渡り鳥の剣
士や銃士とか、対テロ戦隊の变身ヒーローとか、シェイプシスター
な赤毛の少年だろう。

『世界』は時間そのものを止めているので除外。

ジョゼ兄がルーンを唱えると、精靈達が碎け霞となる。

その霞がジョゼ兄を覆い始め……と言つ所でジョゼ兄の姿が消えた。
それと同時にドスンと尻もちをついた。痛い。
気がつけばオレが座っていたソファが消えていた。
周りを見ればニヤニヤと笑うジョゼ兄。

そうかお前か。

お父さんとお母さんは何が起きたのか、ビックリして声が出ない様で、シャル兄はポルナレフになっていた。

「ジヨゼ兄イ」

「フフフ…『加速』の魔法でお前の位置を動かしただけだが、こうも面白い事になるとは。非常に愉快だ。」

HAHAHAHAHAHAHAHAHAHAと笑うクソ兄貴の顔をぶん殴ろつ。そうしようと飛びかかるが、あっさりとかわされた拳句に、落ちない様に掴まえられた。非常に屈辱である。

力なくしくしなさいと叫られた。畜生。

「 そ う か 、 ジ ョ ゼ フ が 虚 無 の 担 い 手 か 」

仕切りなおした空氣の中でお父さんが重たく息を吐く。その重たい空氣の中、誰も彼も沈黙を守っていた。

「おめでとう。兄さん。正当な王権は兄さんにあるんだ。」

そんな中、シャル兄がジョゼ兄を祝福する。
ちょっとは空氣読めよと言いたいけれど、整った笑顔が酷く歪んで
いる気がした。

ジョゼ兄は何も言わなかつたけれど、

その様子に気がついたオレはシャル兄へ言つた。

「シャル兄。悔しいの？」

「…ジョルジュ。何を言つてゐるんだい？ 序列からしても兄さんが正しい王なんだよ？」

「でも、オレだつたらこんなとき絶対に悔じこと御ひ。だからシャル兄だつて絶対に悔しつつて気持ちになると思ひー。」

「ジョルジュ、僕は違ひと言つてこるよ。なのに何故そつとつ事を言つんだ。」

「だつたら、その手は何だよ。」

オレはシャル兄の手を指す。

硬く握られた手からは血が流れ、滴となつて落ちていた。

「つー？ こ、これは…違ひ…違ひんだ！」

自分でも気がつくことは無く、シャル兄は閉じられた手を開こうとするが指は開かなかつた。

両親やジョゼ兄も初めて見るシャル兄の様子に驚き、何も言えなかつたが。

「そんな様子で悔しくないなんて嘘だー。」

オレはそう言つた。

シャル兄はそれを聞いて、顔をくしゃくしゃに歪める。

泣いているのか、怒っているのかは解らない。

シャル兄はゆっくりと頭を下げてソファに座る。

表情は見えない。

でも、シャル兄の悔しさ、悲しさがぽつりぽつりと聞こえてくる。

「…………」

「…………」

僕は…………僕が…………ガリアの王になりたかった…………。

兄さんが無能と言われる中、僕が褒め称えられた。

僕がこの國の王となることが相応しいと言われた時、僕自身もその通りだと思った。

でも、兄さんと過ごすうちにそんな事が幻想だと気がついた。

チエスだって、乗馬だって、勉強だって何時だって兄さんは僕の先を行く。

僕が勝てるのは魔法だけだと気がついた時、僕は絶望した。

でも、認めたくない一心で僕は魔法を鍛え上げ、スクウェアとなつた。

周りの者は天才だと、ハルケギニア最高の才だと祝福してくれた。

だけど、だけれど。

それでも兄さんは負けを認めなかつた。

スクウェアになつても兄さんは悔しがることは無かつた。

僕はそんな兄さんが悔しそうに歪む顔を見たいと、更に自分を鍛えた。

最高の風の使い手と言われ、称賛を浴びても僕が勝つことは無かつた。

そして魔法が使えない兄さんは虚無の扱い手だった。

兄さんが虚無なら僕は今まで何をしてきたんだ？

僕がしてきたのは無駄だった？

なんで……。

なんで兄さんが……。

兄さんがドットでも、僕がドットしか使えなかつたらこんな悔しい想いはしなかつた。

どうして……。

どうしてなんだ……。」「

ずっと溜めこんだ想いが堰を切つて流れるように、シャル兄の言葉が止まる気配がない。

そんな時、ジョゼ兄がシャル兄の肩を抱き直つた。

「俺もだ。俺は、お前が魔法を使える事を羨んでいた。妬ましかった。

魔法が使えない自分が悔しいと思っていたんだ。

だが、そんな感情をお前に知られたくは無い一心でずっと眼を逸らし続けていた。

悔しいと気が付きたく無くて、それ以外に打ち込んだ。

だが、誰も俺を見ない。見てくれない。

魔法が使えないだけの俺と違つて、魔法が使えるお前は誰からも愛されている。

それが悔しかつた。憎かつた。

羨ましかつた。

だが、お前は……お前も苦しんで居たんだな……。

苦しかつたんだな……。

今なら、今なら素直に言える。

シャルル。お前に勝てなくてオレはずつと悔しかつたと。

「ここ……さん。」

「俺が虚無だとこいつのなら、お前との決着が着くことは無かつた。お前の勝負。

お前に勝つ事も、負ける事も出来ないのが悔しい。

お前はどうなんだ。シャルル。」

「僕も……僕だつて悔しこれ。

もう、魔法で兄さんの悔しい顔も見れないなんて悔しいに決まっていゐやー。」

お互に涙を流し、何年も何十年も合わせる事の無かつた本心が繋がつてゐるのを見て、俺ももう泣きそうになつた。

兄さんたちが心を繋げるという様子。

『原作』に無い光景。既に『原作』から離れた姿。

オレがオレの為に壊したこの流れ。

だけれど、一人を見ていると自己満足とわかつていても嬉しくて、泣かないと決めた西田から涙が溢れてきた。

「で、だ。」

ん？

「ジヨルジュ、お前は何者だ？」

一難去つて、また一難。

そんな言葉が奔る。ぶっちゃけありえない。

「まあ、俺達の弟なのは今更だ。

ジヨルジュだからといふ言葉で片付けても良いのかもしない。
だが、お前はあまりに賢すぎる。知りすぎている。

お前は何を知っているか教える。むしろ、キリキリと吐け。」

もひびうごにもなれ

四面楚歌。

そんな言葉が浮かんだオレに逃げ場は無かつた。

3話（後書き）

前半が予定に無かった流れになってしまい、後半との空氣の違いが凄い。

でもラストの緊張感が無いの作者のヌクモリティ。

4話（前書き）

書きはじめたら一気に出来あがつた今回のお話。
後半一気に雰囲気が変わってしまいました。
もう少し情景を描写出来るようになりたいです。

9月1-4日修正加筆。

真っ白に燃え付きました。ジョルジウです。
あれから洗いやらいぶちました。

自分が生まれ変わりを経験したということ。

前世がハルケギニアよりも高度な技術と文明をもつた世界だということ。

その世界に「ゼロの使い魔」という物語があり、この世界ハルケギニアを舞台にした話だと言う事。

その話に自分といつ存在が居ない事。

10年後辺りにお父さんが倒れると言つ事。

その時にお父さんから次の王にジョゼ兄が指名される事。

シャル兄がやっぱり悔しさを隠してジョゼ兄を祝福し、疑心暗鬼となつたジョゼ兄がシャル兄を暗殺する事。

正気に戻つたジョゼ兄がその事に絶望して心が壊れた事。

壊れた心の衝動の赴くままに全てを壊そつとする狂王となつてしまふ事。

それによりガリアが割れる事。

最終的に、ロマリアの聖戦の発動とシャルロットを旗頭にした軍によりジヨゼ兄が討たれ、シャルロットがガリアの王になつたと言う事。

また、ロマリアの本当の目的がシャルロットの双子の妹でジヨゼットと名付けられた少女とすり替え、聖地へ続く聖戦を支持させる事。「ゼロの使い魔」の大筋と、ガリアに関係することを全部告白しましたと。序に、地下1000メイル以下に風石が溜まりまくつてハルケギニアがアルビオンに――といふことも話した。

最初は懐疑的に見ていたけれど、あまりに具体的な話だということと、シャルロットの双子という話が出た時にシャル兄が何故知っているんだと言つた事により一応は信じて貰えた。大隆起については皆して頭を抱えることになりました。

「それで、その後はどうなるんだ？」

「細かい所は省くけれど、聖地へ向かう事になつた主人公。待て、次回――」

「……肝心な所がこいつそり抜けているな。」

「そもそも、オレが存在する事で『原作』を正伝とするならこの世界は異典、外典と成つたと言つてもいいし。

前半の山場とも言えるガリア関係が一気に解決しちゃつたからなあ。正直、オレはどうすればいいのかサッパリです。」

「肝心な所で使えん奴め。」

「本當だから反論できませんです。」

でも、オレのハートはボロボロだ！

「まあ、お前が何故知つてゐるのか、賢すぎるのかが解つた。」

「うん。」

「なんといふかな、驚くべき所は幾つかあつたがな。
お前と、お前の持つ知識は確かに異端過ぎる。それを再認識した。」

「うん……。」

「兄さん……。」

流石にオレは受け入れられないのだろうか。
そう思うと心が軋む。

「ジヨルジヨ、そう苛めるでない。」

「そうですね、父上。」

それに、さつきも言つただろう。

お前が何であるかとお前は俺達の大事かは不明だが弟で、父上達の
息子なのだからな。」

「その通りだ。ジヨルジヨ、お前がお前として生まれたのは不幸
なのかも知れないし、幸福なのも知れない。」

だが、お前が何者であろうと私たちの大事な息子で有る事には変わりが無い。

それにだ、私はお前に感謝しているのだよ。

ジヨゼフとシャルル。私はどちらを王にするか常々悩んでいた。その答えを示し、また二人の違えていた心を繋げた事。

私はそれを嬉しく思うよ。」

お父さん……。

「そうです。あなたは変わった子だと思つていましたが、それでもわたし達の子だと言つ事には変わりありません。

あなた自身、今まで黙つていた重荷に耐えていた事。母として支えることが出来なかつた事を悲しく思います。

ですが、これからはわたし達が生きている限りあなたを支えましょう。

そして、あなたもわたし達を支えてほしい。家族なのですからね。」

お母さん……。

「家族か。

……僕は今まで何をして來たんだろうね。

兄さんを妬み、娘を捨てて……。もう一人を一人分愛そうなんて酷い親だ。

親として、家族として最低な僕だけはこれだけは言える。

ジヨルジュ。きみは僕の、僕達の家族だと。」

シャルル兄い……。

「三度目だが、お前は俺とシャルルの弟で、俺達の家族だ。まあ、お前が変人なのは今さらだろうし、今更だが生まれ変わりや

未来の知識を持つているなんぞジョルジュだからしょうがないでと
いつ話でしかない。

お前が何者であろうが、お前で遊ぶには関係の無い事だ。」

ジョゼ兄……。

俺でつて、なんだよ。俺『で』つて。

「だからだ、その、なんだ……。涙を拭け。顔が酷い事になつてい
るぞ。」

「ふあい……。」

ジョゼ兄からハンカチを貰つて顔を拭つても涙が止まらない。
涙を止めるにはしばしの時間がかかった。

涙が止まつたあと、ジョゼ兄にハンカチを返そうとしたけれど、い
らんと言われた。ちょっと泣いた。

「さて、ジョゼフよ。

来年の降臨祭が終わつて直ぐにお前に王位を譲るつもりだからそ
のつもりで居れ。

そして、シャルルは宰相としてジョゼフを支えるように。

ジョルジュは特に決めていないから一人に迷惑をかけないようじ
なさい。」

「父上!?」

「なに、元々どちらかを王位と決めたら直ぐに譲るつもりだったの
だ。」

それがジョルジュの知識では最期の時まで伸ばすこととなつたようだがな。

私ももう老いた。この先のガリアを動かそうと言う力も無い。だが、若いお前たちならばジョルジュの言う一四年の猶予を私よりも有効に使えるだろう。それをお前達で生かしなさい。」

「わかりました。父上の冠、一年後に必ず譲り受けましょ。」

ジョゼ兄がお父さんにそう言つて頭を下げた。

「さて、もう夜も遅い。解散し、休みなさい。明日から忙しくなるであろうしな。」

お父さんはそう締めくくつた。

お父さん達と別れたオレ達三人は同じ方向にある寝室へ向かいながら話をしていた。

無論聞かれたくない話でもあつたのでサイレントをかけて。

「……全く。ジョルジュの言つ事には驚かされたばかりだったよ。」

「

苦笑しながらシャル兄は言った。

少し窺うように俺は聞いていたけどシャル兄はそれを見て苦笑する。

「確かに驚いたけれど、ジョルジュはジョルジュに変わりないさ。ただ一つだけ聞きたい事があるんだ。」

「聞きたい事？」

何の事かと首をかしげる。

「ジョルジュは自分の無事の為に僕達の仲を取り持とうとした。でも他にもやりようがあつたんじゃないかなってね。」

「えつ……？」

「例えば、僕達のどちらかの肩を持つてどちらかを切り捨てる。これも宫廷では一つの方法だ。」

それともう一つ。僕達一人を消して自分が王となる。二つづつ手段もありといえまありだ。

王族は多かれ少なかれ敵が居るしその地位を狙う者だつてい。ジョルジュは何故僕達の仲を取り持とうとしたのかなってね。」

シャル兄の問いに俺は思い返す。

確かに割と簡単に行く方法はあったのかも知れない。
でも俺は一人と仲良くして欲しかつた。
だつて……だつて……ああ。そうか。そうだつたんだ。

「嫌なんだ。」

「嫌？」

「そう。嫌だ。
簡単な答え。」

「物語でも良くあることだけど。仲が良かつた兄弟が争う話なんて

良くあると思う。」

そして兄弟が引き離されたり、誤解し合つたり、憎み合つたり。
物語の最後は和解して絆を取り戻すっていうものもあるけれど。
どちらかを失つたりしてその絆に気づく。その悲しみが嫌なんだ。

哀れで、悔しくて、悲しくて嫌なんだ……。

だからオレは一人が争うのが嫌だつた。

どちらかを失う結果が嫌だつた。

一人に心の底から笑いあつて欲しかつた。

だから……だから……。」

オレは溢れる涙を止める事が出来ない。

二人が居なくなるなんて考えると心が苦しいから。

「ジョルジュ……ありがとう。」

撫でてくれる手が暖かくて嬉しくて、いっぱい泣いたのにまた涙が出そうだった。

ジョゼ兄は何も言わなかつたけど暖かな眼で見ていてくれた。

「うー……。」

自分の心に渦巻いていたものが晴れたのかこつくづくづくづくと波打つように眠気がやつてくる。

今まで見ていたジョゼ兄はその様子に気が付いて眠いのかと聞いてきた。

「眠たいのか?」

「うん……。」

「なら俺の背中に乗れ。送つてやる。」

その言葉に甘えて俺はジョゼ兄の大きな背中に乗る。

背中から伝わる振動が心地よくて、俺はゆっくりと夢の世界に旅立

つていった。

「……全く。大した奴、大人びた奴と思えばコイツはまだ子供だつたな。」

「……そうだね。僕達はそれに甘えていたのかも。……兄さん。」

「なんだ?」

「娘を……ジョゼットを取り戻しに行きます。僕の勝手で捨ててしまつたあの子を。」

「そうか。ならば後は任せとおけ。」

「ご迷惑…掛けます。」

「馬鹿が。こう言つ時に迷惑なんて関係が無いだろ?が。」

「…そうだね。」

「俺もお前と、お前達と別れるのは『嫌だ』な。」

「僕も『嫌です』よ。兄さん。」

あの日から数日もしないうちにジョゼ兄が正式にガリアの国王として指名されたのだった。

それと同時にシャル兄が次期宰相として任じられる事も発表された。この発表に驚く者たちが多く、中には「陛下は乱心なされた。」などという噂が侍従達の話から伝わってくるくらいで、聞いた時はムカついたけど、ジョゼ兄は気にするなって言つていたのでオレも何も言わないのでおく事にした。

シャル兄はあの日の後何処かへ旅立つていったようで、ジョゼ兄は何処へ行つたのか知つてゐるみたいだ。

そんな困惑と喧噪に満ちたヴェルサルテイルで関係なくオレはのんびりと最近の日課になりつつあつた魔法の訓練を行つていた。

「『ハイミング・ウインド』……」

呼び声と共に放たれた風の魔弾が的へ幾度も喰らいつく。

その姿はさながら姿無き獵犬いつたところか。

発動した魔法をじっくりとみていた元騎士の従者兼今は教師役のエルネストは今の魔法に対する評価を語つ。

「少々威力が低いですね。それに風の魔法にしては速さが遅いです。発想は面白いとは思いますが、やはりトライアングルは無いと厳しくはありませんか？」

「うーん……でも始めたばかりだよ？ 威力は低いのは解つてるさ。威力ももちろん考えるけど一番の目的としたいのはやっぱり速さと正確さ、そして数かなあ……。」

「つまりは誘導性能と連射性能を上げたアレンジ魔法ですか。面白い発想ですね私もやってみましょウ……『ハイミング・ウインド』……」

エルネストが唱えた風の牙は的に喰らいついて的を蜂の巣のようにいくつもの穴を空けた。

流石スクウェア。やつぱり騎士団に選ばれていただけの事はあるんだなあ。

「ふむふむ。改める余地はありますが生物相手では便利になる技だとおもいますね。特に相手を狙つという部分は味方に当てないと言う利点も出できますし。

ただ、やはり改善点は風の矢の威力とスピードですね。この辺りを

クリアしないと疾さが特徴の風魔法とは言い難いです。

やはりここは風の矢の形状の改良をえた方が良いかもしません。

風系統はただ固めて撃つだけじゃ威力がでにくいですから。」

エルネストはそう論じてくれた。

手を加えるならば風の矢の部分かあ。

矢…矢…^ヤja……やあ……ん…。

つと、ずれてるずれてる。

なんで嬌声になってるんだよ意味わからんねえよ。

しかし、風の魔法ってさただ撃つだけじゃダメなんだよねー。

今の所エア・スピアーノ様に先端が鋭い空気の杭をイメージしているけど、直射線上に打ち出すエア・スピアーノに比べて誘導弾に近いエイミング・ウインドは威力がかなり落ちているみたいだし……。

とはいってもエア・ハンマーみたいに大きくして威力を出すにして

も普通にエア・ハンマーを打ち出した方が早いしなあ……。

既存の魔法に手を加えただけのアレンジ魔法とはいっても奥が深いもんだ。

まあ、直ぐに必要つてわけじゃないし。じっくり考えよう。

「そうだね。とりあえず、風ならシャル兄…シャルル兄様なら詳しいと思うし聞いてみる事にするよ。」

言い換えたのはお父や……父様から「お前もそろそろ王族として表に立つのだから出来るだけ相応しい言葉づかいをしなさい。」という言葉をもらつたからだ。

たしかに公式の場とかで「ジョゼにいへ」とか言えないしね。

「教師役といふのにお役にたてず申し訳ありません。」

エルネストは申し訳なさそうに言つけれど、正直俺一人だけだとど

うすればいいかわからないし出来たとしても中途半端な出来になると思う。だから一緒にいてくれるエルネストの存在はとても嬉しい。

「そんなことないよ。エルネストは「王子!」…え?」

エルネストにお礼を言おうとした時、エルネストがオレに覆いかぶさってきた。

それと同時に爆音と衝撃が響く。

「何者だ!」

覆いかぶさったエルネストが陽の当らない影に向かつて吠える。隙間から見えたのは杖を持ち黒い装束に身を包んだメイジだった。その姿にオレは直ぐに正体を思い浮かべる。

暗殺者

こんな白昼堂々と襲撃を仕掛けてくるなんて何処の馬鹿だと内心憤慨しているが、

突然降りかかる殺意に自分の身は縮こまつて震えていた。

怖い。

そんな考えすら浮かんでくる。

それを知つてか知らずかエルネストは俺を抱えたまま走りだした。

「ジョルジュ王子。私がついていますから大丈夫です。」

エルネストは『ウインドブレイク』や『エア・ードル』で襲撃者を牽制しつつも人の多い場所へと移動していた。

しかし、襲撃者はエルネストの魔法を掻い潜つて徐々に距離を詰めてくる。

そしてエルネストに接敵した襲撃者は杖をエルネストへと向ける。杖の先に集まるのは赤の力。

マズイっ！

「伏せて！」
「つ！－」

オレの声に従つてくれたエルネストは直ぐさま体を倒し間一髪と言う所で杖から放たれた火球を逸らしてそのまま相手の心臓田掛けて『エア・ニードル』を突き刺した。

「ガ……ッ……。」「

突き刺されたまま倒れた敵は胸から血を流しそのまま動くことは無かつた。

「ああ……。」

この生で初めての死を見た俺は怖くて怖くて一步も動けずその場に座り込んでしまい、エルネストが体を抱えてくれる。

「ジョルジュ王子。大丈夫ですか？」
「あつ……うん……うん……う、う……うう……うわあああああああん！－」

うあああああああああああああああああああん！－

エルネストの暖かな掌のぬくもりが伝わつてくる事に安堵を覚えた

オレはポロポロと涙を流し始めて仕舞には大声で泣き始めてしまった。

自分は大人だからなんて何時もは強がってはいるけど、いつ言つ時、精神的に子供なのは解らないけれど。

すごく怖くて、どうしていいかわからなくなつて自分の思考が泣いている想いと泣きやみみたい思い。いろんな考えがぐるぐるまわつてどうにも泣きやむ事が出来ない。

でもエルネストは優しくオレの背中を泣きやむまで抱きしめてくれたのがすごく恥ずかしくて嬉しかつた。

同時刻。

数人の屍が豪奢な調度品や芸術品が散乱し荒れた部屋の中での姿を晒していた。

倒れたその躯にはいずれも心臓が貫かれていた。

その部屋には死体を何の感情も抱かず窓の外を見つめ続ける男…ジョゼフと、四肢の腱を切断され舌を噛み切らないように布を加えさせられたジョルジュを襲つた男と同じような格好をした者が居るだけであつた。

恐怖に震える男は目の前のバケモノが作り上げた惨状を思い返す。

襲撃を仕掛けた時に田標である無能王子ジョゼフを殺す。

ただそれだけだった。

それだけのはずだった。
杖を向けて其々が魔法を唱え終えた時あつさりとジョゼフを殺した
と思っていた。

だがあのバケモノは自分達が唱え終えた後には仲間の心臓を既に貫

いていたのだ！

その後直ぐに自分に両手両足が折られた青には、仲間達があっけなく心臓を貫かれて倒れしていく姿だけだった。

自分は直ぐに布を詰め込まれ逃げ出す事も出来ない。それらを全て一瞬で行つたバケモノは一体何なんだ！

「怖がらなくてよい。直ぐに仲間の元に旅立てるだらうからな。」

感情の色さえ感じさせない無機質な声から発せられたその言葉の羅列。

男が理解できるのは終わったという事を理解するだけだった。

「絶望させいやうつ……誰を狙つたのかと言つ事を……。」

ジョゼフは窓をずっと見続ける。

その視線の先に映るのは泣きじやくる弟の姿だった。

それを見続けるジョゼフの無機質な表情。

その顔は家族ならば一目見ただけでその感情を理解するだらう。

怒りと。

あの後オレは衛兵達に連れられて部屋に戻つたのだった。

ヴェルサルテイルはオレとジョゼフへの襲撃が起こつたと言つ事で上も下も大きく騒ぐこととなり、

オレは暫く部屋で過ごす事になった。

ただエルネストも護衛としてずっと付いていてくれたのでそれほど寂しくは無かつたけどね。

べ、べつに寂しかったんじゃなかつたんだからね！

……「めん、自分で言つてなんだけどキモかつた。速やかに記憶から削除しておくれ」とこする。

4話（後書き）

修正版です。後の話が少し長くなります。

5話（前書き）

前回のオチと主人公中二になるの一本立てです。
かなり捏造が入っていたりします。

あの事件の後、白昼堂々と王家の人都を襲撃したといつことでガリア王家の威信にかけて犯人を草の根分けてでも探したらしい。

らしいと言うのはまだ幼い俺に報告するのも野暮だと周りから判断されたのだろう。

詳しいことはジョゼ兄から聞いたけれど、あんまり詳しいことは話してもらえなかつた。

ただ、エルネストは知つてゐるらしく詳しく述べうとしたら相当えげつない手を使つたくらいしか聞き出ることはできなかつた。その時は諦めたのだけれども、数年後に事件を思い出して調べてみたら細かい所は省かれていたけれども幾つか解つた事が有つた。

捕まつた犯人はオルレアン公派に属していた貴族ではあつたらしく、ジョゼ兄や俺を殺せばシャル兄が王として指名されると思つたらしい。

どちらにせよ犯人はもう親族諸共物理的に抹消されてゐる上、お家取りつぶしという処分が既に下されている。

領地は王家が没収しており代官が派遣された所、何と言つて良いのやら治安最悪、病は流行つてゐる、土地は荒れ果てていたとどうやつたら其処まで放置できるのだろうかと頭が痛くなつた、

税金も9：1とバカみたいに搾りとつてゐると本当に絵にかいたような悪徳貴族つぶりの人物のようで、罪悪感はあまりなかつた。

ただ、件のバカ貴族がシャル兄の為に、なんて言葉も恥も無く吐きだしていたらしく。

その発言に怒りを覚えたジョゼ兄がその馬鹿貴族の目の前で一族を処刑していき、最後に自動投石機なんていうマジックアイテムをど

これからともなく持ってきて死ぬまで延々と貴族にぶつけたらしい。死んだ後は死体を焼き尽くして刑場の墓場に捨てたらしいけど。あまりの悪辣さにオルolean公派の貴族が次々と抜けだしていく事となつた。

最後に残つたのは純粋にシャル兄の事を考へてくれるような人間だつたらしく、そういう貴族は能力に合わせてという但し書きは付くが信用できる人間として重用されていった。

それから1年が経ち全て何事も無くとはいかなかつたが、
降臨祭の後、無事にジョゼ兄が王位を継いだ。

やつぱり周りの貴族。特にシャルル派が騒いでいたけれどシャル兄が宰相位に就くと言う事で段々と収縮していつたのだった。
お父さん…父上はそのままヴェルサルテイル内の離宮へと移り悠々自適に過ごすということらしい。

また、その半年前。

父上の最後の仕事としてガリアの悪習。

双子を忌むという事を公式的に撤回し、双子の存在を公式的に認めると言う法が定められ、反応も様々であつたが。

王家自身がこの悪習を否定するという発言を出したことで受け入れられていつた。

親権を改めて主張という事で、自分が双子の片割れだと騙る者も出たりと混乱もあつたが、

ガリアのアカデミーでその者が双子であるか否かといつマジックアイテムが作られた事で次第に落ち着いていった。

そして『原作』に出てきたセント・マルガリタ修道院や双子の弟といつた人間が集められていた聖堂の存在が暴かれ、そこに居た子供達は希望するならば親元に戻つたり、色々な理由で戻れなくなつた者はヴェルサルテイルの城で法衣貴族としての教育を受ける事となつた。

この事でロマリアが敬虔な信徒を奪うなどと文句を言つてきたが、ガリア側は、明らかに貴族の娘や息子と知つて集めている事は不自然である。と主張。

実際、息子や娘のスペアとして使われていただけではなく、ロマリアの都合によつて、片方を暗殺し、すり替えていたと言つ事も発覚したために、確信的な賞利誘拐という目的もあつたといふことで国内での対ロマリアへの感情が悪化してたのだった。

多くの子供達が親元へと戻る事になつたけれど、親権を認めない貴族や既に家が取り潰された貴族の子達は親元に戻れないと言つ事で悲しそうな顔になつていた。

中には、オレの存在を知つて何故かビックリする子もいたけれど、以前のような引っ掛かる者が有つたのでチェック入れておこうと思う。

ジョゼ兄は自身がコモンスペルは使えるようになつたということは隠さなかつたが、虚無であると言う事は知らせてはいない。

周りはやつと無能から半人前かと嘲笑していたが、その後、脱税や汚職（実際やつてた）で捕まつて姿が見えなくなつたらしい。

「ジョゼ兄を馬鹿にする者はいつの間にか城から消える」とそんな噂が経つたので次第に静かになつていった。

シャル兄は、あの夜の後直ぐにジョゼットを取り戻しにいった。

そしてその後、双子の悪習が撤回されるまではずっとオルレアン公邸にて家族4人で過ごした。

しかしだ。今までの心の澱みや、ジョゼットを捨てた苦しみから解放されたという事もあるけれども、これは無い。

オレが教えた精霊への交信を試してみた所、ヘキサゴンメイジになつてしまつたと聞いた時は頭を抱えてしまつた。

あつさり限界超えやがつて。これだからガリアは……。

え、俺も？

ですよねー。

ちなみに、オレは今は貴族の子達と遊んだり、勉強したりと一人きりで少し寂しかつた頃に比べて騒がしい毎日を送つていた。
最初は王子ということで畏れられたり、敬われたりしたけれど、一緒に遊んだりしたことで大分仲良くなれた気がする。

特に、チェックを入れていた子。
ユーラとラウルの二人とは仲が良い。

この二人はやつぱりと思って探りをいたら二人も転生者とわかつた事もあり、秘密の共有という理由もあつて仲良くなつていった。

そして、二人にも精霊の存在を教えたところ、直ぐに魔法を使いこなし始めた。

ユーラが風の系統を。ラウルが土の系統を得意としたメイジとなつた。

優秀なメイジの才能があるのかと見られたのか、二人に家名と子爵位のマントが送られ、

ユーラ・ド・ル・ルシエとラウル・ド・ミコールとなり、オレの従

者となつた。

まあ、本当の理由の一つとしてジョゼ兄に「人も転生者だと教えた」ということもある。（公式的には上の理由となつてゐるが。）

ユーラーの名前についてだが、問い合わせられた時はオレが決めたんじやないと主張した。

決して、ピンク色の髪をしているからではないと思う。（ちなみにラウルは穏やかな顔立ちとはちみつ色の髪で、肩まで伸ばしている。ユーラーは何となくだけピンク色の髪のリリカル世界のエリオっぽい気がする。）

また、イザベラもブチ・トロワから出てきて女の子達と遊んでいたりする。

ちょっと勝気な女の子ではあるけれど、原作の様な刺々しさは無い。少しずつではあるけれど俺のいる世界は良くなつてきている。先にある不安はあるけれど俺が一番身近だった事柄が終わつて何とか気が抜けていたのかもしない。

そもそも、俺がいる事で有り得ない事象が有り得てしまつていたのかもしれない。

何が言いたいのかといつとだ。

現在進行形でピンチです。

攫われました。犯人はエルフです。

オレとセットでユーラーとラウルも居ます。

こうなつた経緯についてだけど、

ヴェルサルテイルに白昼堂々とエルフが侵入。

エルフが現れて周りが大混乱。

オレが人質で動けない。

そのまま誘拐。

アーハンブラ城に幽閉。 いまこ」

ピンポイントで俺が狙われた気がするんだが、何でだ？
眼がバレたのか…それとも違う理由か…。

というか、原作を見て思ったけど子供ですら見下す氣満々でイラッ
と来ます。

アーハンブラ城と知った理由だけれど、何処だと騒いでいたら教え
てくれました。（高圧的に。）

逃げ出したくても、杖も取られてビデウしようもなく。
大人しく捕まっているしかなかつた。

ストレスが溜まる中、檻の中で過ごす俺達だったがエルフの看守役
がやつてきて俺達をアーハンブラ城の一室へと案内された。

「強欲な蛮人の子よ。お前達には生贊になつてもらおう。」

部屋に入つてすぐに、エルフの一人が言った。

「傲慢なエルフの大人は子供を苛めるなんて、自称・選ばれた民に
しては面白いご趣味をお持ちで。」

意趣返しに嫌味を送つたが、良い具合に顔が歪む様が面白い。

「愚かな蛮人が！」

嘲笑を隠そつともしなかつたので、怒ったエルフから拳が飛んだ。凄く痛い…口も切つてしまつた。だけど、絶対に泣きたくは無い！

「フン！　すぐにその愚かしい心も無くなるだらう。精々僅かな時間で過ごすがいいさ。」

そう言つてエルフは何かが入つた瓶を取り出した。

心…つてマズイ！

あれはエルフの毒じやないか。

「おい、やめる！」

「俺は叫ぶが、エルフ達はクスクスと囁うばかりで止めようとはしない。」

「全く、穩健派の連中にも困つたものだ。愚かしくも蛮人へと干渉して聖地への信仰を止めようなどとは！
だからこそ、私達は蛮人の長の子を攫い、心を碎き、奴等の愚かな考えを正さないといけないだらう！」

エルフは薬を持って近づいてくる。

「ふざけるな……。」

「心を失うのはお前だけだ。後の一匹は安らかに眠らせてやるわ。」

整った顔に張り付く嫌らし笑みを隠さずともしないエルフはそう
言った。

ふざけるな。

「ああ、飲むがいい。」

やつらって薬を口に付けられる。

心を弄られるなんて嫌だ！

嫌だ嫌だ！

お父さんこのぬかご。

ジョゼ兄やシャル兄。

イザベラや双子姫。

ユーラとラカル。

沢山の人達との思い出を壊されるなんて嫌だ！

友達を見殺しながら嫌だ！

いやだよ……いやだよ……。

「ガキが！ 早く飲め！！」

力が欲しい。

状況を切り拓く力が欲しい。

友達を助ける力が欲しい。

何もできない弱い自分に力が欲しい。

二人を守る力が欲しい！

アイツラを焼き尽くす力が欲しい！

アイツラを切り刻む力が欲しい！

力が欲しい。

だから、お願いだ。

「悪魔だろうが、神様だろうが誰でも良い。」

そう願つた瞬間、世界が輝いた気がした。

衝動が、力が溢れんばかりにオレの体を滾らせる。

風が。

火が。

力を貸してくれる。

オレに従ってくれる

た
べ
く
..

九四
无攸利

四庫全書

少陰引經

断罪のよう。

死を与えよう。

焰よ。風よ。

「邪魔するモノは燃え散らせ。一切合財切り刻め。」

蒼い焰が眼の前の敵を喰らい、焼き尽くす。

悲鳴すら焼き尽くすように燃え上がり、散っていく。

蒼き風が不可視の刃と成つて切り刻む。

擂り潰す。押し潰す。砕け散る。後には何も残らない。

エルフどもの姿は消えた様に死んでいく。

骨すら刻んで死んでいく。

魂すら焼き尽くして消えていく。

全部無くなつた時、ふと気がついた。

ユーラとラウルは何処だ？

辺りを見渡して二人を見つけた。

びひつたんだわ。

そんなに去えてどうしたんだわ?

邪魔する奴等は全部居なくなつたの。

エルフは皆死んでいったのに。

ハヤヒツはみんなきてこつたのに。

ふたりはおれをみてくる。

ふるふる、ふるふるふるふるふる。

おれを見てふるえている。

えりつてだらう。

なんでだらう。

ふたりにちがいきこみよ。

「…ひー。」

……もしかして。

ふたりがおびえているのせ

オレ?

オレは目の前が真っ暗になつた。

ユーロ視点。

ドサリとジョルジュが倒れた。

ジョルジュが炎と風に包まれ、蒼く染まつた炎が全て焼き尽くした。
蒼く輝いた風が全て切り裂いた。

ジョルジュもその絶対的な力に全身が飲み込まれていたのに、火傷一つ。傷一つも無い裸身を晒して殺し尽くした。

ジョルジュの蒼穹に煌くその目から離す事が出来ない。

神話に出てくるような絶対者が愚者を叩き潰すかのような光景。

俺とラウルはただ畏れて震えているしかなかつた。

そしてジョルジュが俺達の方を向いた時、恥ずかしくも悲鳴をあげた。

それを聞いたジョルジュは糸が切れた様に倒れてしまった。

ジョルジュを見ていると怒りが湧いてくる。
何物でもない、俺自身への怒りが。

ふざけるな。

俺は友達に怯える奴だったのか？

女々しく震えて可愛らしい悲鳴を上げる様な奴だったのか？

「ふざけんな……。」

そんな自分へ嫌悪でいっぱいになり、独り毒づいた。

こんな時自分はどうするんだ？

決まっている。

震えが止まらない足を無理やり立たせ、ジョルジュの元へと向かう。そして、一糸身にまとっていないジョルジュに触れた時、触れた手が熱さに襲われ、風が俺を押しのけた。

収まつたと思っていたけど、大間違いだ。

触れた時に理解した。

熱が、風がジョルジュに集束していつている事を嫌でも理解してしまった。

火傷を負つた手を復活したラウルが冷やそうとしている間も、この事を苦々しく思つた。

際限無く集まつた力が暴走していると、理解させられたからだ。

「何をしている、蛮族の子よ。」

どうしようもない現状に押しつぶされそうになつた時に、低くも良く通る怜俐な声が響いてきた。

エルフの男視点。

ネフテスの老評議員でもある私が統領テュリュークから使命を受けたのは三日前のことだった。

エルフの過激派が蛮族の長の子を攫い、鬻り者とするという話を聞いた。

誇り高き我らの同胞がそんな事をすると聞いた時は何かの間違いだと疑った。

しかし、既に事が動いており。私はそれを止める為に呼ばれたと知らされた時に頭痛がしたのは氣の所為ではないだろう。

全く愚かなことではあるが、彼らの行ったことは明らかな背信行為を見過ごすわけにはいかないだろう。

面倒ではあるが、彼らを捕縛する為にも私は向かわなければならなかつた。

そして彼らが集まっているというアーハンブラ城へと辿り着いた時、精靈が怒り狂うのを感じた。

否、精靈から伝わってくる何者かの怒りが私に触れたのだ。
何事かと思い立った私は急いで中へと入り、城の一室に蛮人の子供が三人だけ居たのだ。

干渉すべきかと悩んだが、恐らく彼らが攫われたと言う者たちだろう。

私は蛮人の子へと語りかけたのだった。

振り向いた一人の蛮人の子は私を見た途端に警戒心を隠そつともしなかった。

そして倒れた子の周りに精霊達が異常なまでに精霊達が集まっているのを感じた。

やはりか。

あたりをつけた私は彼らの警戒心を刺激しないように話しかける。

「私はお前達に危害を加えない事を誓おう。

私は老評議会の要請を受け、背信者であるエルフを抑える為に派遣された老評議員ビダー・シャルだ。

その使命を満了させる為、お前達に質問する。

この場で何があったのかを話すがいい。」

子供達は顔を見合わせ、頷きあつた後に何があったのかを話してくれた。

エルフ達が倒れた子に薬を飲ませようとした時に、子供から凄まじい火と風が集まり彼等を影一つ残さず狩りつくしたと言う事を。

それを聞いた時、私は耳を疑つた。

蛮人の子が我らエルフの同胞達を無傷で殺しただと易々信じられるわけが無かつた。

しかし、倒れた子が。あのとき感じた怒りの根源がこの子供ならばあり得ぬことではないだろうと頭の何処かで、普段の私からは考えがつかない考えが浮かんだのだ。

私は見たままを報告する為、直ぐにでも立ち去りたかったのだがそうにもいかないだろう。

倒れた子に集う精霊たちの力が尋常ではない程に集まつてきている事をただ居るだけで感じるのだ。

もしこのまま集め続けた末に解放されたらどうなるのか、危機感を覚えた私は取引を持ちかけた。

彼等は渋々ながらも了承し、

無駄な争いを避ける為に過激派達がエルフではないと言ひ事とする事。

その対価として子供の治療を行うと言つ事となつた。

私だけだつたのならば直ぐさま逃げようとしただろつが、この二人は蛮人の魔法を扱う者なのか風の精靈と土の精靈の強い力をそれぞれ感じた。

彼らの力を利用するため、私は一人の手を取り、精靈へ呼びかけたのだった。

土、水、火、風。

4つの精靈たちの力が私たちを巡り、ゆっくりと世界へと解放されていく。

想像以上に力を溜めこんでいたようで想像以上に疲労してしまったが、処置が終わつた後私はこの場を後にした。早く伝えねば。

疲れた頭ではそれだけしか考えに無かつた。

…。

…。

んあ？

あ……そ……？

鉛の様に重たい体と頭に映る世界からは柔らかな陽の光が見覚えのある光景で映つていた。

ここってグラン・トロワのオレの部屋だよね……？
確か、オレ達攫われて、エルフに毒薬を飲まれかけて……。
そして、オレが……、そうオレがエルフを殺したんだ。
あの時世界が広がった気がした。力が漲つた気がした。
あの時は本当に現実だったのだろうか？

……火よ出ろ！

なんて出るわけな……

ボオ。

「ちゅつ、まじで？」

やはりあの時と同じく蒼い火が、あの時よりは遙かに小さいけれど、確かに火が俺の手の上に灯っていた。

……ということは。

火と同じように風を吹かせてみると、あの時の様な蒼い風では無かつたが確かに風が部屋を巡っているのを感じだ。

これなんて精霊術。

そういうメタな思考が頭によぎるが、確かに火や風から精霊達が俺に従つてくれていると感じた。

火も布団に触れているが、俺が燃やそつとは思っていないので全く燃えない。

……いや、蒼いからって常時神炎？

火を消して頭を抱えるが。

オレって何時神凪厳馬になつたんだと内心ツッコミを入れた。いや、ちゃんとオレはジョルジュだけどさ。

：あー、もうじつとしても答えは出ない！

オレはベットから飛び起き、ドアを開けようとドアノブに触れようとした瞬間顔を強打した。

ばなぢでだ。

顔の治癒と、鼻血を止めた後、部屋に入ろうとしたイザベラが皆を連れてきた。

ジョゼ兄は政務が終わっていないので来れなかつたけれど、シャル兄があの後何があつたのか説明してくれた。

オレがあの後倒れ、危険な状態だつたらしいこと。

エルフ達は後からやつてきたビダーシャルというエルフとの取引でエルフが誘拐したことではなく、

俺達をさらつたのはエルフではなく。エルフの名を騙つた亞人で、その事に怒り狂つたエルフが一人で亞人を滅ぼして、そのまま去つて行つたと言う事言を公式的に発表した事。

その後、王軍が倒れた俺とユーラー達を保護した事。
ヴェルサルテイルで俺が眠つたままもう半月が経つたと言つ事を教えて貰つた。

今は関係者しかいないので、杖も無しに火と風を操れるようになつたと言うと。

シャル兄が「ジョルジュだしね」と軽く流された。

むしろ、精霊が見えるなんていう事ができるのでそつ言ひ事が出来ても別に不思議では無いんじやない？

つて、言われて納得してしまつたオレがいた。

また、あの後からユーラーとラウルも風と土をそれぞれ操れるようになつたらしく。

そつちの方が驚きだよねつて言われてちょっと泣いたのはひみつ。一応、この力は普段は杖を使つてているという形にしておきなさいと言われたのでちゃんと了承しておきました。

最後に、あんなことがあつたから暫く大人しくしておきなさいとう言葉も貰い、

大人しく従つてのんびりと本を読んだり、イザベラやユーラー達と話したり。

たまにシャルロットとジョゼットがお見舞いに来て、可愛らしい二人を愛でたりしたり、撫でたりしたり。

一応カモフラー・ジュー様に杖として使える腕輪が欲しいとジョゼットと相談して過ごして言つたのだつた。

対価に『場違い』な本の翻訳をする事になつたけど良い暇潰しだつた。

本でいうかマンガだけどさ、

ジョジョ1部から6部まで完全セットとかピンポイントあるぞね？

とりあえず、『世界』のナイフ投げとかを教えてみて早速使ってい
るジョゼ兄だつたけど、ちょっと押してはいけないスイッチを押し
た気がしたのは気のせいだろ？

WRYYYYYYYYYYYYYつてやつてるのもオレは見ていない。

数年後、偏在するナイフなんてマジックアイテムを入手したジョゼ兄が某弾幕の影響を受けて、
『エターナルミーク』とか『ジョゼフの世界』とか書つのもオレの
所為では断じてない。

5話（後書き）

エルフのモブには大体こんな印象を持つてます。

6話（4月8日改稿）（前書き）

やっと改稿です。

作品 자체を忘れていたわけではありませんが、筆が進まない。
他の方の作品を見て回るだけで時間が進む進む。

言い訳にすらなりません。

最近は最近でPSP02とかもうすぐスパロボ一次とか誘惑が
沢山です。

頑張って投稿していきたいです。

改めてよろしくおねがいします。

誘拐事件から早くも1年が経ち、城の警備の問題点も見直された。王族が誘拐されたということで近衛騎士団はその責任を問われてそれぞれの騎士団の団長は職を辞し。

精銳とはいえ騎士団の中には家柄だけで入った奴も居る訳で、そう言つた人間も騎士団から出ていくことになった。

新たに団長に選ばれるにあたつて、以前は家柄も重視されではいたのではあるが、今回は王の意向もあってか完全に実力と人望を考えて選ばれる事になった。

現在ではオレが翻訳した日本語の本をジョゼ兄が読んで、統治へのヒントにしてそれを発案したり。

そのぶつ飛んだ案をシャル兄が抑えたり、受けいられる様に修正したりと慌ただしい日々を送つていて。

今の大臣や官僚は優秀な人間から選ばれてはいるのだが、流石にジョゼ兄の鬼才にはついていくのが大変なようで連日彼等の部屋の床や部屋の前には誰かが倒れているらしい。

あまりのブラックさに引いていたオレだつたが、どうにもこうにも以前までの官僚や大臣がどこの部署にも賄賂やら横領といった行為が延々と積み重なつていたようだ。

良くもまあ国が終わらなかつたと言えるほどであった。

そんな彼等の努力に涙したオレは彼らに感謝を述べる事しか出来なかつた。

言つまでも無いがそんな汚職貴族共は程度にもよるが、財産をいくらか没収したり。

酷い場合には貴族位没収の上、領地没収等も行われている。ジョゼ兄は呆れた様にこれで中央の強化が大分進んだと言つていたけどね。

官僚及び大臣、彼等の休暇はまだこない。
そして彼等が倒れるまで後少し。

「ハア……？」

お披露目？

オレの？

なんで今更……確かに生まれた年と2年前にやつたはずだよね

そんな慌ただしいグラン・トロワにある王室用の食堂。

王家人間だけ卓に着く事を許されたその一室。

ジョゼ兄と一人きりで朝食を摑っていたオレはテーブルの反対側に居るジョゼ兄にそう言った後、スープを掬って飲む。

申し訳程度に香草を浮かべているだけで具も何も無いように見えるけれど、澄み切った黄金のスープから伝わってくる味はしっかりと食材の凝縮されてある様に舌の上で躍る。

ほっこりとスープを全て食べ終えた俺は余韻に浸り溜息を漏らす。イカソイカソ。トリップしてしまって恥ずかしいなもう。

ちなみに、今食卓に就いているのはオレとジョゼ兄の二人だけ。

シャル兄はオルレアン公領に帰省しているし、イザベラもそれに着いていつてしまつたので食堂で他に居るのは給仕くらいなもので外の時間から切り離されたような感覚を覚える。

そうそう、二年前というのはオレの社交界への初お披露目の場。あの時は非常に緊張してカミカミだった。

ごめん思いだしたら頭を打ちつけたくなつた。

「ジョルジュ、頭を突然打ちつけ始めるのはやめろ」

「今日も最高の味をありがとうございましたって後で料理長に伝えておいて」

「かしこまりましたジョルジュ殿下」

「そして何事も無かつたように振る舞うな」

うつせえ。

黙つてろ。物凄く恥ずかしいんだ。

給仕長へにつこつと笑つて感謝を伝えると、給仕長は頭を下げる。
最初は少し戸惑つてはいたようだけど今では慣れたものだ。

ちなみに今日の献立はスープとパンとサラダ。それに焼いた魚が出てくるだけのシンプルな朝食。

本来ならば朝にゴテつと料理が出てくるのがハルケギニアの王侯貴族の常識……といふか贅沢だったが、

ジョゼ兄も残す量が多い事を嫌つっていたのか、朝昼晩とバランスの良い量に調整した料理を作れと命令したのであつた。

このことで普段からもつたないと思っていたオレもこれに賛成したが、周りの者や更には料理人達が反対の声をあげた。

だがしかし。負けたくない俺達兄弟は確実に勝利を得る為にシャル兄に協力（脅して）を要請（巻き込み）したのだった。

四面楚歌。始まる大舌戦。

シロかクロか決着付ける為のダンガンロンパ……とはならなかつたが、彼等を論破するのはなかなかに骨が折れたものだつた。ジョゼ兄が何故かオレに振るものだからかなり大変だつた。

最終的には量が減る分は質を上げる。

量が少なくてみずぼらしいのなら優雅な盛り付けをすればいいじゃないという意見を挙げ、賛成を取り付けたのだ。

おかげで最近の食卓事情は質が大幅に上がつた食事で正直幸せなの

である。

それに料理長達はオレ達の健康にも気を使ってくれるので万々歳だ。

その時の事を思い出していたオレはグラスに注がれた冷たい水を飲み干す。

丁度いい冷たさで喉が潤う。

「聞け」

「めんなさい。

「で、何なのさ一体」

「簡単に言つとお前の魔法の披露会といったものか。

お前が魔法を3歳のころから使えるのは今更な話ではあるが、実質お前を出汁にした社交会だな。

オレもシャルルも似た様な事をやつたものだからお前もと言つ訳だ」「大体は解つたけどさー…ぶっちゃけ最近のガリア王家は色々と突き抜けちゃって加減が出来るのか解らないんだけど」

お披露目と言う事は、広く貴族達にオレの実力と言うか才能が知られると言う事だ。

それは別にいいんだが、最近の王家とその周りの人間の実力の向上がおかしいのでどのあたりが適正なのが具体的に良く分からぬ。ジョゼ兄は『加速』を基本にした超高速戦闘術があるし、シャルル兄はソロでセプタゴン（七角形）・スペルを使えるようになつた。

オレは火と風でそれぞれオクタゴンまで行ける。そもそも精霊術でそれ以上で更に細かい制御が出来るんだけどね。

パシリのエルネストも精霊との交信法を教えた結果ペンタゴンクラ

スだし。

ユーラーとラウルに至りては精霊術を習得したおかげで、単独系統で6つを普通に足せるようになつてゐる。（その上更に別属性を足せる）

まあ、あまりに異常といつかこれらが広まると厄介事しか呼び寄せないだらうと言ひ理由から、

この事を知つてゐるのは本当に信用できる人間にしか知られていない。

でもシャルル兄が

「これでも烈風に勝てるなんて難しいだらうね」

そう言つていたのが耳に残つた。

どんだけ烈風つてチートなん？

「……まったく。バグめ。とりあえず、トライアングルとでも名のつておけ。シャルルが教えたとでも言えれば周りは納得するだらうからな」

「そつくりそのままお返しします！　あとシャル兄の名前使えば大丈夫だらうね」

具体的な話題には出さないけれど、オレはこいつもの様に切り返したのだった。

ちなみにバグとか言ひ言葉づかいが最近ジョルジュ語と呼ばれ始めたのは何故なんだろうか。

オレは恋愛原子核は持つてないはずだけど。

「まあ、最近天才児が多いといつ噂ではあるが、これからお前は色々な意味で前代未聞のメイジとして話題に登るだらうから覚悟だけはしておけよ」

最近天才児が多いということはオレと同じ転生者の存在が関わっているのではないかという可能性があるが、詳しいことは解ってはない。

ジョゼ兄の方針で今は転生者達を積極的に取り込む必要が無いといふことで、オレ自身も特に異論は無いので、その方針に従っている。まあ、どの家も魔法のお披露目をしているということではないが、やはり噂は流れるものでどこの家の御子息やご令嬢が10歳云々でトライアングルやらスクウェアだという話が流れてくるのである。だからというわけではないが、

「面倒

「決定事項だ。精々貴族共を楽しませるような余興を考えておくことだな。そうすれば俺が面白い」

「悪魔め……」

「何なら悪魔らしい方法で楽しむまでだ」

「ド畜生……」

こいつして一人きりの朝食は終わった。

朝食の後、自室に戻ったオレは椅子に座つてジョゼ兄から言われた事について考えていた。

余興……ねえ。

ジョゼ兄は

『オレはトライアングルクラスで一つす』

なんてただトライアングル・スペルを使って見せると書ひ駄である事を言つたのではないだろ？

一応会場の書類や招待客の名簿やらを注約付きで見せて貰つたけど、
出るわ出るわ大量の大物貴族の名前。

普通にやるなつて言われていたのが良へくわかつた。
もう、深く考えるのは止めよう。

とりあえず、手持ちの能力で何処までできるかだけど……。
なーんにも思い浮かばない。

溜息をついてベットにころんと横になつて、ぼーっと披露会の事を
考えていた。

そういうや披露には夏季休校に入った貴族の子息達も幾つか来る予定
があるつていつてたなー……。

そういうや夏つていえ巴ガリアの夏は結構爽やかだよねえ……暑いの
はどこも同じだけど。

昔は一度ビアガーデンでキンキンに冷えた酒を飲んだり焼肉を食つ
たりしながら花火をみたつけなー……あ、花火？

これだ！

季節の新緑に包まれたヴェルサルテイルの庭園。

そこに開かれたジョルジュ殿下の魔法の腕を披露する夜会に参加したのだが、ジョルジュ殿下も最近流行りの「天才」メイジだという。招待状を見た私は苦笑して、自身の子の優秀さを自慢する貴族から、良く招待状が送られたなど、思ったものだ。

確かに、5歳かそこいらでラインクラスになる者は天才と言つても良いだろう。

だが、その流れにもしさか飽きといつものが訪れており、王族とはいえその程度では満足されぬだろうと内心同情したものだ。

やがて夜会は始まり、国王陛下からジョルジュ殿下を紹介された。

成程。

確かにその歳にしては聰明であると言える。

しかし、魔法はどうなのかと冷ややかに眺めていたものだった。

ジョルジュ殿下が杖を取り出し、スペルを唱えて杖を振ると風が会場を包み込む。

その風に巻き上げられた花の花弁がジョルジュ殿下の傍で舞い踊っていた。

風のメイジなのだろうと思わしき貴族達はトライアングルクラスかとひそひそと話している。

トライアングルとはいえ、これでは地味過ぎて他の系統に伝わらないうだろうに。

そう思つてみると、殿下が更にスペルを唱えている様子が見えた。

更に杖を振ると、花弁が燃え上がり、紅、蒼、黄金と艶やかな炎が生まれた。

それを見て私は成程と感心したが、それはただの前座にしか過ぎなかつたのだ。

炎が収縮して火球となり、強い火の力を感じた瞬間。色とりどりの火の球が高く空へと飛び上がった。

何をしたのかと呆けていると轟音が響く。

この場所で大砲！？

急いで周囲を見てみれば空に花が咲いていた。暗闇を照らすその花は一瞬で散つてもつと見たかつたという哀愁を思わせたが、更に音と共に花が咲き乱れる。

なんといつ……なんといつ……美しさだらう。

華やかさだらう。

そして、優しさだらうか……。

周りの貴族達も、演奏していた音楽隊も空に咲く火の花に魅入っているのか恐ろしく静かな空間。

「皆様。楽しめたでしょつか？」

ジョルジュ殿下の声で凍つた時間は直ぐに解け、全ての話題が殿下の事へ移り変わって行つた。

その後しめやかに夜会は終わつたのだが、

後日。あの魔法がリュティス全域で目撃されたと言う噂が流れ、社交界は暫くジョルジュ殿下の火の花が話題を擡つて行つた。中には火と風のメイジで再現できないかと言つ話まで出てきており、新しい楽しみが生まれそうである。

オレが行つたことは魔法で花火を再現する事だつた。

ハルケギニアにも花火はあるが、日本の様な形の花火は存在していないのだ。

しかも精々が打ち上げ花火ではなく、仕掛け花火のようなパーティーの演出や余興ぐらいなどでしか使えそうにないものばかりだし。そんな訳でオレは火の色と風向き等を調整して花火を打ち上げたのだつた。

でも打ち上げるだけじゃつまらないかな」と思つたので、

会場に飾られている花の花弁を風で巻き上げてから火を付け、それらを種火のように使って打ち上げ花火をあげたのだつた。

結果は大成功。

呆けた様に空を眺める招待客が面白かった事は心にしまつておこうと思う。

披露会が終わつた後、ジョゼ兄からよくやつたと褒められたのだった。

貴族達が呆けているのが非常に面白かつたらしく。

何か好きな褒美でもやろうと言われたので、せつかくだからと力をある程度解放できる場所が欲しいと伝えた。

ジョゼ兄は暫く時間がかかるがそれで良いなら待つておけと言つたが、

それがあんな事になるとはなー…。

ネタアフターE.F編 ジョルジュがBETA世界に来ちゃいました。（前書き）

続きが書けないけど関係ないネタは浮かぶ。
どうしようもないので思い浮かんだネタを投下してみた。

ネタアフターIE編 ジョルジュがBETA世界に来ちゃいました。

色々あつたけど、最終的にガリア大勝利で終わった大隆起を端に発する口マリアの陰謀事件。

これで枕高くして眠れるぞ つと寝ていたら、朝起きた時に何故か見覚えの無い部屋に居た。

どーみても知らない天井。

なんでかなーと思っていると何かに抱きつかれている感覚。首を動かして横を見ると全く知らない男と目が会った。

「へ、へるー」

「みーとう？ ……じや、ねえええええ…！」

ゴメン誰か説明して。

それは、語られる事は無い結末。

「オ、オマエは一体誰なんだよ…？」

「ジョルジュ・ド・ガリア今年で18かな。で、君は？」

「オレは白銀武。俺も18だな……って違うー」

「おお、見事なノリツッコミ！」

「何か疲れてきた……」

「元気出せよ！」

「お前の所為だろ！…」

「そんなんに怒るなよほっしー」

「ほっしーって誰！？」

「えつ、タケルの中の人？」

「中の人なんて無い！」

とてもちこせな、

「またこの世界か……もつ一度戦えって言ひのうか純夏？」

「マジでロボットだーカッコいいなあ」

「オマエはもつと真面目にしろ！」

「アイタツ！ なにすんだテメー！」

「なんだろう？ この懐かしくも逃げられない雰囲気」

「エーテルファイスト！」

「あがー！？」

とてもおおきな、

「また来たの？ ガキ臭い英雄さん」

「夕呼先生……まさか！？」

「思つての通りよ。最もアンタには余計なモノもつてているようだけど」

「オレの事ですねわかります」

「で、アンタ何なの？」

「異世界の転生した魔法使いです」

「……（可哀想なモノを見る）」

とてもたいせつな、

「……魔法使いなのは信用するわ。実演してもらつたしね。で、転生つて何よ。私たちの事を知つて居るみたいだけど？」

「死んで生まれ変わって、今の自分になる前にマブラブオルタネイティヴっていう白銀武が鑑純夏を救うノベルゲームがあつたんですよ」

「それはオレ達の世界が創られたって事なのか！？」

「落ちつきなさい白銀。創られて居ようが居まいがこの世界が今在る事には変わらないわ。そんな些細な事はどうでもいいの。私が知りたいのは、アンタが知つている事全てよ」

「大したことじゃないですよ。オレが知つてるのは白銀という視点から得たモノくらいですし、オレ一人居ようが居まいが大局的にはそう変わりは無いと思います」

「……使えないわねえ」

「幼馴染に気がつかなくて他の女の子とちち繰りあつていた白銀よりはマシだと思いますよ？」

「それもそうね」

「なんか矛先が俺に！？」

「気のせい気のせい」

「そうよ白銀」

「仲良いですねアンタたちは！」

「とてもふしぎな、

「今日から訓練兵になりましたジョルジュ・ガリアです。よろしくお願いします！」

「同じく訓練兵になつた白銀武です。よろしくお願いします！」

「二人は香月博士の元で働いていたが、元々正式な階級を持つては居なかつた。特に白銀は現役の戦術機乗りだ。得る部分は大きい。

共に訓練が出来る事を幸運に思え！」

「……で、白銀は良いとして、ガリアは何が出来るの？」

「ジョルジュでいいよ。えっとね、こう指先から……火炎放射が！」

「な、なにやつてんだジョルジュウウウウ！？！」

「更には空を飛べます！」

「……わあ お空をとんでますー」

「ジョルジュ浮いてる」

「なんとも不思議な光景だ」

「……って、何やつてるのアンタは！ 貴方達も現実逃避しないつ！」

「やううと思えば、このように金を作る事も」

「すごいピカピカだねー」

「（タ呼何でこんなトンテモ無い子連れてくるの――――？）」

あいとゆつきとまほづのおじぎばなし

「行くぜタケル！」

「おう！」

『人類を、人間を、俺達を、無礼なBETA！？』

ネタアフターIE編 ジョルジュがBETA世界に来ちゃいました。（後書き）

この話を書く予定は未定です。

思いつきジャンルが違いすぎてジョルジュの存在がギャグにしかならない。

やあやあ。

プロデュース・オレの花火大会から一年程が経つたんだけど、オレの生活は変わらず城の中で完結しています。

一応は誘拐された王子様なんで、再犯防止の為にもじつとさせておきたい所なんだろう。

幸いにして、ジョゼ兄のやることなす事が娯楽になつていて。オレ自身も翻訳の作業や魔法の訓練、礼儀作法や歴史文学教養といった勉強で退屈といつのは無縁だつたけどね。

前二つはともかく、残りは非常に面倒なんだけど本当に最低限の教養が身について居ないとオレ自身がバカにされるどころか。ガリアという看板にも傷が付いてしまうので必死に覚えていく所。

正直一人だけだと嫌になつてサボる事は確定だつたけど、エルネストのマネージメントとサポートでなんとか最低限の教養が身に着いたと言えるだらうという所までこぎつける事が出来た。

本当にエルネストの存在は有り難かつた。

今度お礼にプレゼントを渡したいと思うんだけど何が良いんだろうか？

良く考へる必要がありそうだ。

個人的なお礼だから、あまりに高価なモノはまず除外されるし。王族という観点からアットホーム過ぎてもまた困る。

うーむ……難しい。

とりあえずこの件はゆっくり考へる事にしよう。

「ジョルジュ様そろそろ訓練の時間になりますが……」

「そうだったね。直ぐに行くから待っていて」

「かしこまりました」

とりあえず、さつさと着替えて訓練場へ行こうと。

……

振り抜かれる棍を受け流す様に自分が持っている棍で防ぐ。相手も隙を与えないように打撃を与え続けるが、無論そのまま受け続けるだけではなく。

タイミングを合わせて、相手の棍を弾き飛ばした。その隙を狙ってすかさず棍を相手へ打ちつけるも、するりと抜けられ頭部へ衝撃が走った。

「いつてー……」

「中々上手くなりましたね」

相手だったエルネストは爽やかにそう言つが息を殆ど乱して無いので非常にむかつくのである。

くそ、また負けた。

オレを痛む頭に簡単なヒーリングをかけて髪をわしゃわしゃと搔く。

今やつて居る事は棍を使った近接格闘術で、エルネストがその道の達人だということで稽古を半年前からつけて貰っているのだけど。実の所、最初はエルネストがその道の達人だとは知らなかつた。（正直に伝えたら何故かがつくりと地に手をつけていた。）

エルネストの家はどうやらロバ・アル・カリイエから伝わったとする武術（本人曰く由来が不明。一応ハルケギニアでは無いから東方（ここでは無い所）の名を冠している）を継承しそれをメイジの戦法に組み込んだ功績から興された家である。

しかし数百年前から、ここ十数年年の長きにわたつて「貴族とは優

雅たれ」という考え方が流行し戦闘メイジですら精々杖剣……あるいはレイピアを振るうくらいでメイジ、ひいては貴族が近接戦闘を行う事が泥くさくて優雅じやないと言う事で実戦を見据えた戦いをする戦闘メイジがマイナーになりつつあった。

今でこそ知る人ぞ知るものではあるが、その間も磨き続けられた業は確かに今でも伝えられている。

というか、実体験で味わっている。

ちなみに、いつもの二人も訓練に参加しておりユーグは槍を。ラウルは三節棍（ハルケギニア種別的にはフレイル）を使った戦闘術を教わっている。

多様な武器を扱えているエルネストに改めて感心したのは「コだけの話である。

この話を聞いたエルネストが元々私は騎士だったのですが……とガツクリと頭垂れていた。

「三人とも本当に筋が良くて、たった半年でここまで強くなっているようですね、そろそろ戦闘を意識した武器を作つても良いかもしれませんね。陛下からもお許しが出ているようですし」

「え、本当？」

「本当ですよ。ただ、陛下から王族とそのお供なのだからそれなりに高級なものでないといけませんので職人と打ち合せしなければいけませんがね」

「オーダーメイドということですよね？」

「そうですね武器であると同時に、「杖」でもあるのでオーダーメイドのほうが良いと。シャルル宰相閣下の判断もありましたので、予算もかなり組んで戴いています」

「シャル兄も関わってるの？」

「ええ。ですから三人にはもつと力をつけて欲しいのだそうです」

シャル兄も関わっていると聞いて何だが少し嬉しくなってきた！

よし、頑張るぞ！

「エルネスト。早く訓練の続きをやひつー！」

「かしこまりました」

結果は惨敗。

ちくせう。次は負けん！

……

訓練も終わり、その後は特にやる事も無かつたのでオレは翻訳済みの書類を持ってジョゼ兄の執務室へ向かう事にした。
向かう途中、文官が倒れていたが何時もの事なので女中のメイドに仮眠室へ連れていくように頼んでおいた。

そんなこんなでジョゼ兄の部屋へ就いたが、ドアをノックしても反応が無い。

むしろ、ドタバタと部屋の中から音がしている事が非常に気になつた。

どうしたものかと一瞬迷つたが、何かあつてからでは遅いだろつと思つオレはドアを開けた。

「ジョゼ兄、入るよ？」

扉を開けると其処には黒髪のオレと同じくらいだらつ少年と、少年を押し倒すジョゼ兄が居た。

オレは紳士なので何も見なかつた事にしづつドアを閉めようと「

待て、ジョルジュ！！……ちつ！

「何やつてるのジヨゼ兄？ 少年愛に目覚めたの？ 正直オレも射程範囲内に入りそうだからこのまま何処かへ行きたいんだけど。具体的にはシャル兄の所に」

「待て！
話を聞け！」

「離せ！ 何すんだオツサン！」

「……………ジエフ陛下？」

がこいつなんだ！」

「……少年逃げる。そこのオッサンはお前にキスしようとしているぞ！」

あ
！
！
！

「ジョルジュウウウウウ！」

兄上？

シヤ川尻登場

わあ、盛り上がって来いと叫んだ。

「シャ、シャルル！？」
兄上？ ヒイツ！」
その、だな。これはサモンサー・バントで「

なんかシャル兄から物凄い黒オーラが漂つて来た……。

逃亡者、あれ?

足立重乃著

足元を見るとアーブルハントらしい物体がアーブルの足を掴んでいる
というかシャル兄、土魔法使えたんだね。

「ジョルジウもだよ？」

オレオワタ

といふかシャル兄……最近パラメーター上がり過ぎだよ……。

「うう……頭が痛い」

「自業自得だろ？」

「オッサン」「ワイオッサン」「ワイオッサン」「ワイ……」

思いつきり頭を殴られたから痛いよ。

ジンジンする頭を撫でつつ、隣でブツブツ咳いでいる少年に顔を向ける。

一人凄いトラウマ入ってるなあ。

というかこの少年明らかに東洋人……つーか日本人に見えるんだけど。
もしかして、もしかする?
ちょっと話しかけてみよう。

「なあなあ、少年」

「な、なんだよ！？」

ちょっとビビッついて面白い。

これが「さでずむ」って奴なのか。

「お名前はなんだい？」

「……ひらがさいと」

「〇ヒ……」

やつぱりか。

こつ言つ時になんで嫌な予感だけは良く当たるのかと思考逃避したいが、ちょっと現実を見ないとダメだよね。

何故呼べたなんて答えは出ないし、精々バタフライエフェクトとか現時点では言えないだろう。

オレがこの件で関わるのは一言だけだ。

「で、話を戻すけど。マイツ、ヒラガサイトを使い魔にするの?」

無論、聞くのはジョゼフ兄だ。

「……正直な所悩んだが、この先何かあつた時の保険としては必要だろ?」

「まあ、否定はしないけど……」

「お前の情報からではあるが、虚無魔法には地球へ通じる魔法もあるのだろう? 上手く使えれば、面白い事になるとは思わんか?」

「それ聞いたけど、子供を利用する最低野郎にしか聞こえないんだけど」

「解つて言つていいだろ?」

「一応はね」

「なら問題ない」

左様ですか。

その後の事は言つまでも無いだろう。

契約のキスにまた一悶着があり。

今度はイザベラに白い眼で見られて関係回復に尽力する哀れな父親の姿が在つたとだけ伝えておこづ。

序に言えば風のうわさにジョゼフ陛下は少年愛に目覚めたとか、ジ

ヨゼフ陛下×サイトきゅんとか聞こえたが聞かなかつた事にしたい。
ジョルジュ殿下×サイトきゅんなんてものも聞かなかつた事にしよ
う。うん。

そしてサイトが得たルーンはミョズトニルンで、ガンダールヴでは無かつた。

そこは良いとして、当初ショックで寝込んでいたサイトだが。
ジョゼ兄が家には責任もつて返すから暫く居ると良いと言つて客人待遇として迎えられた。

立場としては、オレの友人としての東方出身の貴族の血を引く子供というもののだつたがある種似た様な立場のユーラー達が居たので特に気にされた風もなかつた。

ジョゼ兄が政務の傍らで虚無魔法を得る為に部屋にこもる時間が多くなつたが、それ以外はサイトと言う友人を加えた生活は今まで通りの時間が流れていつた。

……

それから三ヶ月後、『世界扉』^{「ワールド・ドア」}の魔法を修得したジョゼ兄はサイトとシャル兄、オレとユーラー達を連れて地球へ転移した。

ジョゼ兄自身は既に世界扉試してあり、向こう側でも問題無く使える事を確認していたため問題無く王族男子三人揃つて地球要りを果たしたのである。

問題となつたのは地球へのイメージではあつたが、リコード（記録）の魔法を使ってサイトの衣服や持ち物から地球のイメージを得る事が出来、確りとしたイメージで地球へ行く事が出来た。

ちなみに、イメージがしつかりしていないと変な所に出たり、空中

だつたりするらしく。下手に使うと最悪地中に出る可能性があるらしい。

それを聞いてオレの顔が少し引き攣ったのは仕方がないだろ。一応服装はパンツ（ズボン）にシャツとシンプルかつ現代でも通用しそうなデザインをしそうな服を着ている。解りやすく言つと無難な服装だ。

そして眼の前には漢字で『平賀』と書かれた標識があり。オレはピンポーンと呼び出し鈴を押した。

「はい、どなたでしょう……か」

玄関から出てきた女性。恐らくはサイトの母親だと思われる人物がサイトの姿を見て眼を瞬かせていた。

サイトも久々に会えた母親を見ていたも経つても居られず抱きついた。

サイトの母親も直ぐに動きを取り戻してサイトに抱きついて涙を零す。

「才人……才人……」

「かーさん……かーさん……」

抱き合う親子を見て、最近父上と母上に会つて無いなと思い自分ももう泣きしそうになる。

「母さんどうし……才人！？」

表が騒がしい事に気が付いた才人の父が玄関でサイトを抱きかかえた妻を見て驚いた。

「お前、今まで一体何処に！ そこのアンタ達は？」

「申し訳ありません。私はジョゼフと言つものでして、予期しない事によつてサイト君を連れだしてしまいました。詳しい事を話したいのですが、少々込み入つた事情になりますので中へ入れて貰つてもよろしいでしょうか？」

「……解つた。母さんも中へ行こいつ」

サイトの父はそう言つてオレ達を家の中へ案内してくれた。

「……と、言う訳なのです。三ヶ月の間サイト君を連れだしてしまい真に申し訳ありませんでした。」

家中へ入つた後、オレ達の出自とサイトがハルケギニアに来てしまつた事を、魔法の実演を混ぜて説明した。

最初は懐疑的だつたが、魔法の実演をして納得してもらつた。しかし、ジョゼ兄が偉そうな態度をとらない事に最初違和感を持つたけど。それくらい本心から謝罪をしたかつたのだろう。

「いや……ジョゼフさんとジョルジウ君から確かに魔法といつもの実演をして貰つたので信じる事にしますが。一つだけお願ひがあります」

「はい」

「フツー」

そのままサイトのお父さんの彩人さんはジョゼ兄を殴り飛ばした。あやひと

「これで、サイトを連れだした事についてはキャラにしましょう

「……ええ。ありがとうございます」

お互にケジメをつけたかったのだろう。

その後二人は席に戻り、居直し雑談しながらお互いの話をし合う事になった。

その日は、平賀の家に止まることとなり。
子ども組はさつさと布団にもぐったのに対して、大人組は夜遅くまで宴会をしていた。

兄一人は王族の責務から一時的にでも解放されたのか、羽目を外すのもわからなくも無いけど、やり過ぎじゃないのだろうか。
まあ、その次の日に一日酔いになつたのは自業自得である。

その後、度々平賀家と交流した我がガリア家ではあるが。
交流を続けるうちに、彩人さんが会社を退職し信用の置ける人達に声をかけて貿易会社を興し商売を始めた事を知つた時はサイト共々緑茶を吹いた。

更に、ジョゼ兄と結託した彩人さんが東方との交易を行う商人（と
いう設定）として王家御用達のブランドと、その文化活性から付隨
した市場活性の利益等からの功績により、

領地こそは無いけれど子爵の爵位を貰つたと知つた時はサイト共々
シャルロットが作ったリンディ茶で吹いた。
オレとサイトとは大隆起問題を解決すべく。その方法を模索してい
つた。

そんなこんなで騒がしい日々を送りつつ。

オレは15の年となつた。

7話（後書き）

次から学園編に入つていきますが。
正直飛ばし過ぎたと自覚があります。
また改稿するかも…モウシワケナイデスorz

サイドストーリー ショート&ショート(前書き)

短編2つお送りします。
力を抜いてお楽しみください。

寿司食べたい。

サイドストーリー ショート&ショート

ガリアの薔薇

ハルケギニア屈指の国力を持つ国「ガリア王国」。その首都リュティス近郊に存在する壮麗にして莊厳。

豪華絢爛の粋たる城、ヴェルサルテイル宮殿の一室で一輪の薔薇が咲き誇っていた。

ガリアの誇る青薔薇ジョールと、その親友黒薔薇サイトーン。ふた

「おい、エルネスト。これ書いた馬鹿は誰だ？」

あまりの事に本を灰にしてしまって作者が解らなくなってしまった。この燃えた本を持ってきたのはエルネストだったから、オレは彼に聞いた。

「その……」

「うん。手打ちとかじやないから安心してくれ」

「……プチトロワ富の侍女長です」

「ああ、彼女か。一年給料ナシで」

「かしこまりまし」「殿下ああああ……！」

扉を突き破るように出てきたのは件の侍女長エリザさん（28歳・

未婚）だった。

彼女は魂の奥底から震えるような迫力でオレに向かい合つ。

「殿下、何故。何故私が給料を一年も貰えないのだと呴つのですか！」私のこれから的生活費はどうすればいいのです！」

「いや、別に。基本的に食事は国から三食でてるし問題ないじゃん」

「問題大ありです殿下！　私のお給料が無いとなると私の待つ人が飢えてしまつではないですか！」

「……」

「殿下、意味も無くか弱き者へ虐げる事はお止めください　ア富殿に咲き誇る一輪の薔薇～背徳の愛～」

「男性の同性愛は美しいモノですわ！」

「一応言つておくけど、これ外に出たら即打ちぐ「申し訳御座いませんでした」速つ！」

即座にジャンピング土下座を敢行した侍女長に呆れを覚えた。
まあ、とつあえず。

「侍女長エリザは侍女に降格の上、一年の給料停止。あとその本や
その類は回収後に焚書で」

「うううう……酷いですわ殿下……私の待つ人（読者）が飢えてし
まいますのに……」

「そんな腐った読者は飢えて死ね。氏ねじゃなくて死ね」

オレで濡れ本作んな。

といつうか、王族をネタにするとかマジで命知らずだぞ。

「それとだ。今後、王族関係でそういう薄い本を作らない様に。
本氣で物理的に首を切られても仕方が無いぞ。てなわけだ戾つて良
いぞ」

「うう……」

うつむいたまま元侍女長はオレの部屋を出ていった。

「全く頭が痛い」

「ははは……流石にやり過ぎだったのではないのですか？」

「コレを見てもか？」

取り出したのは一冊の本。作者はエリザヴェート・サフラン。まあ、名前からしてさつきの元侍女長だろう。

その本のタイトルにはこう記されていた。

少年達と指南役の熱き交わり…激しくも淫らな稽古…

「……もう一年給料カット追加でようしかつたのでは?
「だよなあ……」

その後、所謂BL系の焚書運動を行つて一応の排除は出来た。まあ、王族だけはという但し書きが付いたんだけどさ。エルネストマジ泣きしたのが印象に残った事件だった。

嫌な事件だったね……。

今回、王家三人兄弟だけで日本旅行へ行きました。

そんなわけで、今まで行く機会の無かつた寿司にも行ってみた。

「ほひ、これが寿司か」

「魚を生で食べられるくらいに新鮮なんだね」

「序に言えば海の魚だからっていうのもあるかもね」

「なら、まずはタイだ」

「僕はウニにしてみようかな」

「縁側で」

「……ふむ。ショウガとワサビ、そしてコメ…シャリだったか。それが魚の生臭さを消した上に旨味を増幅して魚の甘味が溶けるように舌へと広がるな。美味だ」

「うーん。ウニの食感と共にねつとつとした食感と甘さ、そしてウニに感じる磯の香りがほのか鼻孔を撻つて凄く美味しいです」

「あー、縁側うめー」

「おい、ジョルジュ。お前もなんか詳しく述べメントしひ」

「はいはい。ま、なんというか。縁側の快い食感と共に脂の旨味と甘味が舌にじんわりと広がって、その味がシャリと混ざり合つて味わいの深さを増してるね」

「よし、店主。俺にも縁側を頼む」

「次はカンパチでお願いしますね」

「アワビをお願い」

「確かにジョルジュの言つ通り、縁側の味とシャリの味が混ざり合つた味わいがなんとも言えんな」

「これも中々…魚とシャリの塩梅がお互いを引きたてて美味しいとストレートに表現できますね」

「……アワビの「リコリ」とした食感。そして噛めば噛むほどに染み
でる旨味が口の中に広がつてこれが嗜み締める幸せなのかと思うね」

「ところで兄さん。何時まで味評論をするの？」

「大人しく喰いたい」

「面白みのない奴等だ。わかつた、わかつた、大人しく喰つて構わ
ん」

「松コースお願いします」

「あ、僕も」

「聞け。アワビのステーキを頼む」

「あ、ならオレもアワビのステーキと天ぷら盛り合わせをお願いし
ます」

その後、心行くまで寿司を楽しみました。

サイドストーリー ショート&ショート（後書き）

B-Lなんてオレが書い「うとしたらノクターンかムーンライト直送になってしまいます。
だから書けません。ごめんなさい。

寿司は私の味の記憶から引っ張り出したのを私なりの表現で纏めた
ものです。

なので、これジャナイ等と食べて損したなどと言われても責任は負
いません。

ちなみに私は縁側やアワビ大好きですビバ 寿司
だから、お寿司食べたい。

大事な事なので一回(ry

8話（前書き）

学園入学前です。

説明とグダグダな回です。

最近2次エクリアしてPSPの2.iをやるうとしたらインターネットマルチができなかつた件。

私はキヤストに出会つて人生が一つ変わりました。

キヤス男いよキヤス男。

だから……〔。。。〕ハコモアイシテ

ゼロ魔関係ねえ……。

ガリア ヴェルサルテイル宮殿のジョルジュの自室にて。

その姿は白亜の獣。

されど神聖な氣を纏つており、その面は祭りを楽しむ童の様にも見えた。

共に楽しもうぞ。

「兄様、チエイン稼いで。才人は50超えたらP.Aをお願い。ユーログは援護を」

「OK、シャルロット」

「おう」

「了解」

戦場の先陣を駆けるのは獣の耳を持つ所謂獣人とも言える男が剣と盾を持ち、剣を輝く面へと振るう。

それに続くのは、全身を鋼の装甲に身を固めた騎士の様に見える男。短銃を両手に持つてそれを撃ち続けた。

それと同時に、槍を持つ鋼の騎士が正確無比に面へと突きを放った。

最後に、蒼い髪の少女が杖を振るい獣の足を氷の中へ閉じ込める。その繰り変えしの末、獣の足に着いていた輝く面が碎かれたのだった。

よろじい。

「ヤオロズたんかわいいよヤオロズたん

「兄様自重」

「ジヨルジュ……」

「さすがにフォローできねえよ」

何でヤオロズたんの良さが解らないんだりう……。
ま、気を取り直して俺達が何をやつて居るかと言いつと。
一言でゲームだ。

何故かこちらの地球では2000年時点でのゲームの発売などが前世
の地球より10年前後早くて既に先日3DSなんかも発売されてい
る。

今やっているのはPSPだけどさ。

まさか、PSP02の新作が出ているとは……前々から興味あつた
けど結局出来なくて結局死んじゃつたしなあ。

サイトの方の地球で発売されたと聞いた時は地球へ予約しに行つた
くらいだもん。

ヤオロズたんなんて子もいて万々歳だぜ。

ちなみにラウルはラウルの自室でストーリー攻略中。HMオールラ
ンクSをを目指しているらしく。

「兄様、手が止まってる…」

「つおつと…」

危ない、危ない。

自動回復付けて無かつたら死んでたよ。

話は変わるけど、今現在ガリアは地球との貿易や技術の吸収でそれなりに潤つてたりする。

まあ、平賀貿易会社の成長具合というか、儲け具合がおかしい事に気が付いた政府がガリアとの交易を結んだり、お互いの技術吸収と本当に色々あつた。

そのおかげか、最近日本ではエコなテクノロジーと言う訳で、大気中に存在する新エネルギーを利用した発電や。

魔法技術と科学技術のハイブリッド動力なんかも普及しているようで経済的に良好らしい。

げに恐ろしきは地球の科学者。1年くらいで吸収したと思ったら新しい技術を生み出し始めた事を知った時にはもう苦笑いしか出なかつたくらいだ。

しかし、その勤勉さというかマッド具合？に触発されたこちら側の技術者も向こうの技術を吸収していっている。

向こうが科学技術の開発環境のアドバンテージがあるのかこちら側の魔法技術が乏しいのか中々に判断が困る所だ。

とはいって、こちら側では基本的に環境を極力汚さない方向で技術発展を目指しているのでゆっくりとはいえる確實に進んではいる。

また、大隆起の心配があつたが2年ほど前に風石の大鉱脈へと続く穴を開け。穴を通して大鉱脈にある風石の風の力を精靈術を応用した技術で地上に移して利用する技術をオレとサイトと技術者達で作り出す事が出来た。

それによって現在、ガリアでは風石の暴走の心配が無くなつた事でハルケギニアの問題の一つが解決できたのであつた。

そうそう、地球との行き来だけど。

何時までもジョゼ兄の魔法のみの行き来が出来なくなる事が最初からわかつていたので、

ジョゼ兄とサイトとで大きな鏡を加工して地球とハルケギニア間を移動出来るマジックアイテムの鏡を作ったのだ。

ちなみにオレの部屋にもサイトの部屋に通じるもののが一つ置いている。

その所為か、たまにサイトの部屋でじゅりじゅりしても普通に対応されていたりする。

序に言えば、サイトの部屋のネット回線をハブで経由してネットワーク環境完備だつたりする。

あとは、シャルロットがゲームに目覚めてからはオレの部屋に入り浸つたりする。

オルレアン邸に戻つても、風石を利用した充電器や発電機でゲームしているらしいし。

その所為で田が悪くなつてシャルロットの母親がゲームは1日1時間だけとか何処かで聞いたような話ではある。すごく、庶民的です。

後、シャルロットの性格がタバサ寄りになつてゐるのかは永遠の謎である。

……

ヤオロズたんを倒してから、色々なミニショーンを回りつつ、スナック菓子をつまみながら階でゲームを楽しんでいる中でジョゼ兄が部屋に入ってきたのだった。

ジョゼ兄はオレを見て溜息を吐きながら言った。

「ジ『ルジ』…いぐらオフだからとまことえその格好はどうかと思つぞ？」

「着替えるよ…」

「そういえばジャージでしたね」

「私も家ではジャージ」

「俺も家だとジャージだけ…一応ハルケギニアでそれはどうかと改めて思うぞ?」

皆から言われている様に今のオレの格好は青いジャージなのだ。一応、スポーティーなジャージとはいえ、何処まで行つてもジャージでしかない。

「才人、部屋借りるぞ」

「おう」

部屋主の許可も取つた所で、着替えとマントを持つて鏡の中へ入つた。

鏡を抜けると日本の男子学生の部屋とこえばこんな感じだらうとう部屋があった。

たぶん日本の学生の部屋をイメージできてこるのならばそのイメージ通りの構成だ。

サイトのベッドの上に服を置いて、オレはジャージを脱いで着替え始めた。

着替えた服は白を基調にした上に、そして青いマントとこえシンブルなものではあるが、

近年ガリアで流行っている日本の和文化が混じつており、少々誤解も承知で言うのならば洋風的なシルエットで装飾やパーティが和風ではないだろうか。

はつきり言って日本だとコスプレにしか見えない。どことなく恥ずかしさを感じたので、そそくさとハルケギニアに戻つて行つた。

「そんな格好しているとジョルジュが王子様だつて思い出すよな」「それに関してはノー」コメントさせて欲しい

「ごめんなさい」

「全く、もう少し王族らしくしたらいどうなんだ」

「こんな事言われると思ったよド畜生ー」

失礼な奴らだ。

「そんなことより、本題に入るぞ」

「ひでえ」

「さて、少々面倒な事になつてな。トリステインがガリアに対しても交換留学をしないかと言つてきてるんだ」

「トリステインって、何処だっけ?」

サイトが聞いてきた。

まあ、どうでもいい事何て覚えて無いよね。

「私とお父様の家、オルレアンの領地の隣にある国。領土、経済、

文化、軍事力…ほぼ全ての面でガリアの下を行つてゐる国。でもプライドだけはガリアの遙か上。」

シャルロットが解説するが、普通の認識なのに悪口になるなんてすごいね。

「シャルロットはその国が嫌いなのか？」

「ただ、ありのままに言つと悪口になつてしまつた」

「……まあその国が来年にトリスティンに留学生を多數送つて欲しいそうだ。その中にジョルジュとシャルロットのどちらかは必ず送つて欲しいとな」

「どう見ても人質です。本当にありがとうございました」

「シャルロット自重。で、そいつら馬鹿なのか？ ジョルジュとシャルロットなんて人質以前に自力でのんびり帰つてこれるだろ？」

シャルロットがたまにネタを言つたが今回はサイトがツッコミを入れてくれた。

オルレアン関係者の前で言つとオレが毎回睨まれるんだ。理不尽である。

ちなみに、本氣出せば既にヘキサゴンなシャルロットと精霊術師なオレだと普通に飛んで帰れる。

あ、でもシャルロットは進行方向にある食物は全部食いつぶゲフウ

……。

シャルロット、「めん、睨まないで。

「……私もサイトと同じ意見」

「要約するけど、『東方交易で東方文化にかぶれたガリアが心配な

ので兄弟国でもあるトリステインが素晴らしいハルケギニアの文化を教え直してあげましょう!』といつことらしい。北花壇にも調べて貰つたが概ね同じだつた

「……頭痛が痛いとはこのこと」

「だからシャルロット自重。でも、それってケンカ売つてるの?」「少なくとも手紙を書いた発言者は善意100%だろう。なぜならば書いたのがアンリエッタ王女だからだ」

「「「ああ、成程」」」

「誰それ?」

才人は知らないか。

「あー……解りやすく言つと、絵本に出てくるような「おどぎ話のお姫様」って感じのものかな?」

「付け加えるならば、仕事をしないジョルジュ兄様」

「おい」

「まあ……諸々事情はありますが、王位継承権第一位にも関わらず政治や統治といった帝王学を学ばず、詩や演劇を好むお姫様でしょうか」

「ちなみに、現在トリステインは王位が不在

「……あれ? おかしくないか?」

「現状、取り柄と言う取り柄はトリステイン王家という血統書付の王族の血ぐらいかな」

「なんか悪口になつてないか

「さつきもシャルロットが言つたけど、事實を言つと何故か悪口に聞こえるんだ」

「そのぐらいヤバいのか?」

「「「その通り」」」

「ぶつちやけ、リスクの割にリターンが少ないと書いた国だから狙われないからなあ。

「とりあえず、その話は置いておく事にしてだ。別に断るつもりだが一応耳に入れておいた方が良いと思つて持つて来たんだが」「まあ、別に良いですよ?」

「……いいのか?」

「人質になるわけじゃないけどさ、特等席で見物くらいはしてみようかと思って」

「……お前の事だからそのまま舞台に乱入するのではないか?」

「……」

「田を逸らすな」

「……レコン・キスターの様子見では駄目?」

「……フン、好きにしろ。ただし、留学生は『お前達』から選ばせてもらううがいいな?」

「はい」

そつまつヒジラゼ兄は部屋から出ていった。

「……と、言ひ訳で付き合つてもひづけどいいな?」

「はあ、解りましたよジョルジュ殿下。何処までも付き合つます

こう言つた時ゴーグ達の存在はありがたい。

ホント、俺には勿体ないくらいだ。

「……なんだよその眼は
「いや、どうせ俺なんかには勿体ないとか思つていそうでしたので
……貴方だから着いてきているんですけどね」

「え？」

「コホン。とにかく、トリステインへ行く為の準備をしておきました
よう！」

「あ、ああ」

ユーラは何を言おうとしたんだろう。

「普段馬鹿なくせに変な所で自虐かつ鈍感な所が未だに理解不能」
「全くだな」
「サイトも人の事言えない」
「え、なんで？」
「……もういい」
「なんで杖で叩くんだよー痛いって！」

全く、早く気が付け恋愛原子核平賀型。
え、俺が言つた？ なんで？

シャルロットのイメージがつかないので性格がタバサっぽくなっています。

トリステインをありのままに言つと悪口になつてしまひ。

良い所あつたら教えてください。○rn

大隆起については数行で解決してしまいました。
なんぞだらう?

もっとエピソードあつたはずなのに……。

次回入学編ーといつわけで、次回のキーワードは三つー

ちよつかいをだすおつぱい、

消えたデータ、

絶望シャルロット

次回をお楽しみにー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5982n/>

ガリア王家に転生しました。（再構成、オリ主転生チート）

2011年5月7日02時37分発行